

——我が剣、未だ空には至らず。

矢野優斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

書けば出ると聞いて、最近大人買いしたネギま！ に打ち込んでみたお話。英霊剣豪の最終決戦が胸熱すぎて暴走したとも言おう。

注意！ 霊基の一部を与えられたオリ主ものでありますゆえ、これじゃない！ というところが見られるかもしれませんがご了承ください。致命的な間違いな齟齬があった場合はご指摘してくださいと嬉しいです。

目次

プロローグ	1
第一歌	
剣客少女と子供先生	6
剣客少女とクラスメイト	13
剣客少女とお嬢様	21
剣客少女とルームメイト	27
剣客少女と拳法少女	33
剣客少女と剣道少女	40
剣客少女と剣道部体験	47
剣客少女と放課後ティーブレーイク	54
剣客少女と図書館島	62
剣客少女と魔法の本	68
剣客少女と図書館島地下	76
剣客少女と自称一般人	88
剣客少女と得物探し	94
剣客少女と終了式	100
剣客少女と吸血騒ぎ	107
剣客少女と桜通りの吸血鬼	112

プロローグ

——劍戟が迸った。

空間を自在に走る幾条もの銀閃、散華するは無数の火花。極地に至った劍者が繰り出す斬撃は一つ一つが致死の業。刹那の油断が死へと直結する。

——斬撃が重なった。

片や華やかな衣装に身を包んだうら若き少女。是なるは二天一流の遣い手たる宮本武蔵の名を受け継ぐ劍士。その劍は無空の境地へと至らん。

片や雅な陣羽織を羽織った耽美なりし流浪人。是なるは佐々木小次郎の名を与えられし無銘我流の劍士。その劍は無限の境地へと至らん。

——白刃が激突した。

斬り結ぶ度に両雄の業は天井知らずに研鑽されゆく。金剛石が金剛石でしか磨けぬのと同様、極まった劍士は同じ領域の劍士との斬り合いの中でしか磨かれない。

劍士の極地へと辿り着いた者たち——されど両者はこの世界の人にあらず、原典の武蔵と小次郎ですらない紛い物。名も知れぬ神なるモノの手によつて生み出された偽物でしかない。

——斬閃が交錯した。

彼女との果し合いが必要不可欠だった。己が宮本武蔵であるがために、この闘争を求め続けていた。そう運命付けられてしまっていた。此処に至るまでに幾度となく刃を交えてきた。不完全なまま、未熟なまま仕合つては決着せず終わる。その度に一步、また一步と高みへと歩む。

時には敵味方の垣根を越えて杯を交わして語らうこともあった。旧来の友人の如く言葉を交わし、飲み食いして、背中を預け合うことすらもあった。

されど定められた運命は認めない。融和の未来など許されず、宮本武蔵と佐々木小次郎は死合わねばならないのだ。

そして両者は漸く其々の極地に辿り着き、仕上げの大勝負と洒落込む。

幻想の世界が終わってしまうかもしれない危機を目前にしながらも、両雄は繰り出す斬撃の嵐を止めない。場所が巖流島でなくとも関係ない、今なお周囲一帯が崩れ落ちてゆこうと構うものか。

二人が宮本武蔵と佐々木小次郎であればそこが決闘の地となる。

—— 剣線が踊り狂った。

もはや二人の死合を止めることは何人たりとも能わず。見届け人はただの傍観者でしかいられない。既に二人の剣豪は限界というものの悉くを凌駕し尽くしていた。

止まらない、止まらない。舞い踊る蝶のようでありながら鋭き針を持つ蜂の如き立ち回り。

止まらない、止まらない。風に揺れる柳のようでありながら清らかな流水の如き立ち回り。

何人たりともこの剣神たちの神楽を止められはしない。それは死合っている当人たちも例外ではなく、むしろ終わりなき剣戟乱舞を更に加速させていく。

それが二人に課せられた運命であり末路だ。

神なるモノの戯れか無聊の慰めか、宮本武蔵と佐々木小次郎の霊基を埋め込まれて二度目の生を与えられた少女と少年、哀れな玩具たちと嘲笑うか——

—— 否、断じて否！

此処にて刃を重ねる少女と少年は玩具でも、課せられた運命に唯々諾々と従う傀儡でもない。霊基に引き摺られようとも確固たる自我を保つ一個の人間だ。

ゆえに二人の目的はただ一つ——この勝負物語に終止符を打つため。

激烈な剣刃乱舞が止む。両者共に肉体は生傷だらけ、華やかな衣装も雅な陣羽織も襤褸同然。血潮に塗れながらなお、その瞳は宿命を断ち切らんと爛々と輝く。

次の一合で決着する。もはや語る言葉はなく、両雄は研鑽し尽くし

た至高の剣技をもって証明するだろう。

際限なく昂ぶる剣氣、散るは天元の花か無銘の亡霊か――

――対極の極みがここに激突した。

▽

――青い空で、鳥が鳴いている。

突き抜けるような青空を舞う鳥の影を見上げる少女がいた。

艶やかな髪を後頭部で結び上げ華やかな雰囲気を漂わせている、どこことなく夕暮れに咲く花を思わせるような立ち姿の若い娘。

色鮮やかな着物でも纏えばさぞ絵になるだろうこと間違いなしの美貌。齡十四でありながら大人の女性にも負けず劣らずの体つきであるが、見るものが見ればその肉体が剣士として鍛え上げられた代物であると察するだろう。

背中に二振りの木刀を納めた長袋を背負い、微かに憂いを帯びた顔で天を仰ぐ少女の名は宮本^{みやもと}紬^{つむぎ}。

彼の有名な宮本武蔵が創始したとされる流派 “二天一流” の道場主、十一代目新免武蔵守藤原玄信の一人娘――という設定^{せいりち}を与えられて第二の生を授かった転生者である。

一度目の人生を終えたところで何処ぞの神なるモノの手により “宮本武蔵” の靈基を一部埋め込まれ、二度目の人生を始めるよう仕向けられた紬。その在り方や性格、趣味嗜好は少なからず靈基に引き摺られており、現在進行系でその影響に頭を悩まされていた。

「ちよつと……どこ何処なのよ？」

十二代目を継ぐためにも自分の世界を広げてこいなどという理由で片田舎の中学校から一転、関東にある麻帆良学園都市の中等部へ転校することになった紬は、家族や知り合いとの別れを済ませて麻帆良へ向かう途中であった。

家族と仲の良い友人に見送られ、いぎ駅の改札口を抜けて電車に乗り込もうとしたところで問題は起きた。端的に一言で表すのならば、“神隠し” に遭ったのだ。

紬がその身に埋め込まれた「宮本武蔵」は史実に記された男の剣士ではなく、剪定事象によつて断ち消えた次元出身の女性であった武蔵である。彼女は特異な体質を持っており、そんな武蔵の霊基を一部とはいえ宿すことになった紬もまた、不完全ながらその体質を受け継いでしまっていた。

——「神隠し」改め次元漂流。

幸い紬は宮本武蔵の霊基を全て埋め込まれたわけではないので、神隠しの規模も小さく並行世界を股にかけるようなことにはならず済んだ。ただし自ら次元の穴に飛び込んでいた武蔵と違い、紬の場合は本人の意思を無視した形で引き摺り込まれるのだが。

その神隠しが電車に乗り込むところで発生。今日に至るまで幾度となく経験してきた紬は回避を早々に諦め、そのまま穴に吸い込まれて今に至る。

「うーん、感覚からして日本は出てないわね。場所は……ちよつと分かんないや」

子供の頃から何度も何度も神隠しに遭い続けたせいか、紬はある程度まで飛ばされた距離や場所などが把握できるようになっていた。本人としてはそんな感覚が備わるほど神隠しになんて遭いたくないのが本音であるが。

「ま、いつものことだし、悩んでも仕方ないか。適当な人に現在地を尋ねて麻帆良に向かいましょう」

見知らぬ土地に投げ出されることももう慣れたもので、紬は気持ちを切り替えると歩み始める。

荷物の大半は宅配便で手持ちも大してない状況。何の当てもないくせに楽観的で随分と余裕な態度なのは霊基の影響も少なからずあるのだろうが、今まで何だかんだ切り抜けられてきたという自信があるからだろう。

時に出口の知れない樹海の奥深く、時に硝煙燻る戦場の真つ只中、時に魔法生物なる怪物が跳梁跋扈する魔法世界。およそ考え得る秘境という秘境に飛ばされてきた紬に怖れも迷いもない。ちよつとした寄り道程度に考えて麻帆良を目指す。

「それより麻帆良まで何日かかるのかしら……転校生が初っ端から遅刻なんて格好つかないわよね」

果たして遅刻程度で収まるのか。まず間違いなく、紬より荷物の方が早く届くだろう。

「あ！ そのお爺ちやくん！ ちよつといいかなー！」

気負わず気楽に常に余裕を忘れず、剣客少女は新天地を目指して一歩を踏み出し始めた。

第一歌

剣客少女と子供先生

ネギ・スプリングフィールドは魔法使いである。

イギリスのウェールズ出身であり、メルディアナ魔法学校を首席で卒業した天才十歳児。そして何より、魔法世界では知らぬ人はいないと謳われる英雄、千の魔法を使い熟す最強の魔法使いナギ・スプリングフィールドの息子だ。

十歳とまだ幼い子供であるネギの夢は立派な魔法使い、父親のような偉大な魔法使いになること。魔法学校を卒業したネギには偉大な魔法使いとなるべく修業が与えられた。

修業の内容は日本の学校で教師を務めること。常識的に考えて十歳の子供が教鞭をとることなど不可能であるが、そこは赴任先が麻帆良ゆえどうとでもなる。麻帆良は魔法使い並びに関係者が数多く住む街であり、強力な認識障害の魔法によって多少の異常は異常と認識されないようになっていいるからだ。

従姉であるネカネと幼馴染のアーニャに心配されつつ見送られ、期待と不安で胸を一杯にしながら、大荷物一杯抱えてネギは日本に降り立った。

故郷イギリスと日本の違いに戸惑い、道を尋ねながらもネギはどうか麻帆良へと向かう電車に乗り込む。ここで問題が一つ。ネギが乗り込んだ時間帯は丁度学生の通学時間帯であり、女生徒で溢れ返っていたことだ。

女生徒たちからすれば十歳の子供が高等部と中等部行きの電車に居れば不思議なわけで、それはもう注目される。ついでに言えば色々と接触してしまったりともう大変だ。

「あわわわ……」

所詮は十歳の子供。自分よりも年上の女性に囲まれてしまえばどうしようもなくなる。そんな慌てふためく姿がまた女生徒たちの興味関心を引いてしまうのだから悪循環だ。

「うわっ!？」

ネギが泡を食っていると電車が曲がり道に差し掛かり車体が傾く。吊革に手が届かないネギは動揺していたこともあつて踏ん張れず、背中から床に倒れそうになる。

女生徒たちが驚いて手を差し伸べるのも間に合わず、電車内で盛大に転ぶかと思われたその時、人混みをするりと擦り抜けて一人の少女がネギの背中を受け止めた。

「大丈夫かな、僕?」

「は、はい。ありがとうございます……」

頭上から降り掛かる声に相手を見やる。ネギの背中を受け止めたのは長袋を背負った見目美しい少女であった。

これが英雄の息子ネギ・スプリングフィールドと剣客少女宮本紬の出逢いであった。



「へー、ネギ君って言うんだ。やっぱり出身は海外?」

「はい、イギリスのウェールズ出身です。宮本さんは何方のご出身なんでしょうか?」

「私? 私はね、岡山の美作なんですけど、言っても分からないか」

つい先ほどの一件から済し崩し的に一緒に行動するようになったネギと紬は、混雑する電車内で偶然空席を見つけてそこに座ってお喋りに興じていた。ちなみにネギの席は紬の膝上だったりする。さすがに通学時間帯で混雑する車内に都合よく二人分の席は空いていなかったのだ。

「あの、さっきはありがとうございます宮本さん」

「いいよいよ、困った時はお互い様だもの。それに、私にとつても役得ですし」

「え?」

「いえ、何でも。それより、宮本さんなんて他人行儀な呼び方じゃなくて、気楽に紬でいいわ。もしくは親しみを込めて紬ちゃんでも可」

「そ、そうですか？」

何やら怪しい言動があつたがネギ少年は察せず、紬の勢いに有耶無耶にされてしまう。割と紬のネギを見る目が危なかつたりするのだが、純粹無垢なネギ少年にはまだ身の危険を感じ取ることはできないようだ。

「それにしても、ネギ君はどうしてこの電車に？ 確かこの電車の行く先は麻帆良女子中等部と高等部だったはずでしょ？」

「ええと、それは僕が麻帆良女子中等部で先生をするためなんです」

「ネギ君が先生？ ほんと？」

「本当ですよ？」

曇りない瞳で頷くネギに紬は戸惑いを禁じ得ない。いつから日本はこんな子供が先生になれるようになったのか、前世でもそんな話は聞いたことすらない。

しかしここは神なるモノが転生先にと選んだ世界。十歳の子供だって教師になれる世界なのだろうと紬は無理矢理に自分を納得させた。むしろ自分にとってはその方が都合なまでである。

この剣客少女、霊基の影響か美少年や美少女を前にすると些かばかり見境がなくなってしまう悪癖がある。一応、越えてはならない一線は理解しているものの果たして何処まで信用できるものか。

「でも、そうなるとこの出逢いは必然だったのかもしれないわ。私も麻帆良女子中等部に転校してきた身ですから。ご縁があればネギ君の生徒になれるかも！」

「僕も紬さんみたいな優しい人の先生になれたら嬉しいです！」

「お、言ってくれるねー。このこの」

膝に抱えるネギを思わずぎゅつと抱きしめ、だらしなく頬を緩める紬。ネギが背中に当たると柔らかな目に白黒させていることにも気づかず頬擦りまでしそうな勢いだ。

しかしそこで間もなく麻帆良学園中央駅に到着するという車内アナウンスが流れ、紬の強行は防がれた。

「む、到着するみたい。この混雑具合ですから、気をつけないと人に押し潰されかねないわ。というわけで——」

すくつと立ち上がる紬。その腕にはネギが大事そうに抱えられている。

「あの、紬さん。自分で歩けますから下ろしてもらえませんか？」

「えー？ ……いえ、そうですね。自分の足で歩める男児の邪魔など無粋ですもの」

何だかそれっぽいことを言いつつ凄まじく名残惜しげにネギを手放す。色んなものから解放されたネギはほっと安堵の息を吐いた。

それからネギと紬は流れ出す人の流れに逆らわず、押され揉まれながらも無事に駅を出た。そこで二人を出迎えたのは遅刻しまいと駆け出す生徒の大群。物凄い人の量にネギも紬も目を丸くする。

「うわあ、すごい人！ ……これが日本の学校か……」

「うーん、何だか私の知っている登校風景と違う気が……」

片や純粹に人の数に驚き、片や前世の記憶との違いに眉根を寄せている。

「あ、いけない。このままだと僕たちも遅刻になっちゃいます。急ぎましょう、紬さん」

「ええ、そうね——って、速っ!？」

ダッ！ と地面を蹴って走り出したネギの健脚ぶりに紬は驚愕する。今時の十歳児は路面電車を悠々追い越し、バイクよりも速く走ることができるらしい。

「誰も驚いてないけれど、これが普通？ ……十歳児がバイクよりも速く走る光景が？ ……いえ、私もやれるっちゃやれるけど」

種を明かせばネギの健脚は無意識の魔力強化であり、周囲の面々が気に留めないのは麻帆良の認識障害結界のせいなのだが、知らぬ紬は首を傾げるばかり。

ちなみに紬に認識障害の魔法が効いているのか効いていないのか微妙な理由は既にその手の摩訶不思議の存在を知っていること、何より前世の知識というものがあるからだ。あとはセイバークラスに備わる対魔力もあるのかもしれないが、そちらは雀の涙ほどの効果しかないだろう。

微かな疑問を抱きながら紬は遅れまいと駆け出す。その速さは言

葉通りにバイクを抜かし、先を行くネギに追いつくものであった。

しかし紬にとつて残念なことに、ネギの隣には既に別の誰かがいた。というか、物凄い剣幕でアイアンクローをされていた。

ネギに恐ろしい形相で詰め寄っていたのは甘橙色の長髪をツインテールにした少女。制服からして麻帆良女子中等部の生徒であることが窺える。

「取・り・消・しなさいよ〜!!」

「あいや、あわわ……!?!」

「アスナ、それくらいにしたりなよー。相手は子供やろー?」

「あたしはね、ガキが大っ嫌いなものよ! それにこのガキ、失恋の相だとか不吉なこと言ってくれて……!」

よほど腹に据え兼ねたのか鬼もかくやの顔で睨む少女。その眼光にネギは完全に怯えてしまっていた。

ちよつと離れた隙に何があつたのか事情は知れないものの、このままネギを放置するわけにはいくまい。ついでに言えばツインテールの少女と黒髪の少女、どちらも綺麗どころであり紬的にビビツときたのもあつて是非ともお近づきになりたい所存であつた。

とりあえず今にもネギを食つてしまいそうな少女を宥めんと紬は声をかけた。

「待った待った、そこなお嬢ちゃん。子供相手に暴力は駄目よ」

「なによ、アンタこいつの保護者? って、ちがうか」

くわつと割り入ってきた紬を見て僅かに眼光を緩める少女。さすがに誰彼構わず当たり散らすほどに分別を失つてはいなかつたらしい。

「保護者ではないけれど、知り合いではあるかな」

「だったらアンタがちゃんと見張ってなさいよね。ったく、ほんと失礼するわ」

「わわっ」

放り投げられたネギを紬は危なげなく受け止めた。

「おっと、大丈夫ネギ君?」

「は、はい。怖かったです……」

「あらら、すっかり怯えちゃって。ところで、何があったのか事情を訊いても？」

半ベそのネギと未だ顰め面の少女ではなく、この場で最も冷静そうな黒髪の少女に尋ねる。黒髪の少女は快く一部始終を詳らかに明かしてくれた。

原因はネギがツインテールの少女——神楽坂明日菜に失恋の相、それもドギツイのが出ていると口出ししたことにあった。そこからは怒り心頭に発した明日菜が食ってかかり、先ほどの状況に至る。

「なるほど……」

事の成り行きをアスナの友人である近衛このかから聞いた紬は神妙な表情で頷く。このかの言葉に嘘はない。それくらいは面と向かって話せば分かる。

このかを信用した上で紬はようやく落ち着きを取り戻したネギと目線を合わせた。

「ネギ君、今回は君に非があると思う。乙女に対して失恋だとか言ったら駄目よ」

「で、でも僕は彼女が悩んでるみたいだったから」

「君は親切のつもりでやったのかもしれないね。でも、それで傷ついてしまうこともある。現にアスナちゃんは傷ついて怒ったでしょう？」

「うう、それはその……」

紬に諭されてさすがに無神経な言葉だったかもしれないと思いはじめめる。さすがに十歳の子供に女の子の複雑怪奇な心の機微を察しろというのは土台無理な話であるが、女性を傷つけてしまったということくらいは理解できた。

姉であるネカネから言われた『女の子には優しくなさいね』という言葉も効いてきて、途端にずーんと肩を落とし始める。

「その、ごめんなさい……」

「謝るのは私じゃなくて彼女でしょ？」

紬に促されるとぼとぼとアスナの前に立ち、ペこりと頭を下げるネギ。

「アスナさん、失礼なことを言つてごめんなさい」

折り目正しく謝罪するネギにアスナは苦り切った表情であったが、このかの目やきちんとした謝罪を前にいつまでも怒っているのも大気ない。疲れたように溜め息をを吐きながらアスナは謝罪を受け入れた。

「もういいわよ。どうせガキのやることだし……次はないけど」

ボソリと付け加えられた言葉にネギは背筋を冷やすのだった。

そうこうしているうちに始業のチャイムが鳴り始める。

「ああ！ 始業ベルが鳴つちやつたじゃない。もう、新任の先生も迎えに行かないといけなかったのにどうしてくれるのよおく!？」

「新任の?」

「先生?」

アスナの叫びに心当たりがありまくるネギと紬は顔を見合わせる。

ネギ・スプリングフィールドが麻帆良に訪れたのは偏に修業のため、麻帆良女子中等部で先生をするためである。つまりアスナとこのかがわざわざ出迎えにきたという新任の先生とはまず間違いなくネギのことだろう。

「ちよつといいかな、二人とも」

ネギの背中を軽く押してアスナとこのかの前に出る。アスナから向けられるやや面倒くさげな視線を受け流し、紬は二人の懸念がなくなったことを伝えた。

「先生のお出迎えなら心配ありません。この子が新任の先生みたいだから」

「はい。この度、この学校で英語の教師をやることになったネギ・スプリングフィールドです」

「は?」

「ほえ?」

戸惑いに満ちた声が二人から洩れる。まさかそんな馬鹿なあり得ないと目が物語っていた。

そんな二人の反応に紬は分かるわと言わんばかりに頷くのだった。

剣客少女とクラスメイト

「このガキがあたしたちの担任教師ってどーゆーことですか!」

所変わって学園長室。ネギの発言の真偽を確かめるべく乗り込んだアスナは、学園長である近衛近右衛門から事実であると告げられて絶叫していた。

学園長室内にはアスナ他、このかとネギに紬もいる。

ちなみに紬は学園長の容姿を見て「ぬらりひよん? 学園の長が妖怪って大丈夫なのかしら……」などと呟いたきり、近右衛門の正体を見破ろうとでもしているのかその頭部をじいつと凝視している。

子供が教師なんておかしいと追及するアスナをのらりくらりと躲し、近右衛門はネギとの話を進め、いつの間にか住む場所をアスナとこのかの部屋に決定してしまう。このかの方は特に気にしていないようであるが、アスナの方が断固拒否の姿勢だ。

と、ここにきて学園長の頭から意識を切った紬が勢いよく手を挙げた。

「総大将! いえ、学園長! ネギ君の住居が決まっていないのであれば私の部屋とか如何でしょうか!」

「はあ? というか、ここまでついてきてるけどアンタって何なのよ?」

今の今までネギのことで頭が一杯だったアスナがようやくとその疑問に至る。ネギの知り合いだから学園長室まで同行したのだと思っていたが、どうやらそうではなかったらしい。

「む。よく見たら君、転校生の紬ちゃんじゃなからうて?」

「あ、はい。遅ればせながら、宮本紬です。以降お見知り置きを」

「いやはや、無事に辿り着けたようでよかったの。到着予定日から一週間も音沙汰なしじゃったから、親御さんにも連絡してのう。心配しておったのじゃよ」

荷物だけが届いて当の本人がいつまで経っても来ないという事態に教師陣も焦ったものだ。もつとも、紬の両親の「何処ぞで迷子にでもなってるだけですから、ご心配なさらず。一週間以内には到着する

はずでしょう」という言葉を信じて一応待っていたのだが。

「いやあ、麻帆良に来るまでに色々とありまして……」

乾いた笑いを洩らす紬。やけに煤けた雰囲気というか、色濃い気苦
労の気配が滲み出ている。

そんな近右衛門と紬のやり取りを見て外野三人は驚きの表情を浮
かべている。

「え、なに？ アンタがウチのクラスの転校生だったの!？」

「わあ、この人が迷子の転校生さん？ よろしゅうな」

「紬さん、一週間も何処で何をしていたんですか？」

三者三様の反応に紬は気恥ずかしげに頭を掻く。

「それがまあ紆余曲折ありまして……というか、迷子扱いはちよつと
……」

不服げではあるが強くは否定しない。事情を話した所で理解して
もらえるとは思えないし、知らぬ者からすれば迷子にしか見えないの
も事実であるからだ。

昔からそうであった。最初の頃は両親や知り合いも紬が神隠しに
遭う度の大騒ぎして探してくれたものの、今ではまたかの一言で済ま
されてしまう。何日掛かっても必ず帰ってくるという信頼の証でも
あるのだが、迷子や方向音痴扱いされるようになったことに関してだ
けは紬をして異議を申し立てたい所存である。

「私の話はさておき……如何ですか、学園長？ アスナちゃんも乗り
気ではないみたいですし」

「そう言われてもの。紬ちゃんは紬ちゃんですらルームメイトとの兼ね合
いもあるじゃろうて」

「むむっ、それは確かに」

そも紬はまだルームメイトが誰かすらも知らない状態。勝手にネ
ギを受け入れることを決めたりするのはルームメイトとの関係に不
和を生みかかないだろう。

「それにアスナちゃんとかのこのかの部屋は他より広いからのう。ネギ君
一人くらいじゃついたら受け入れられるじゃろ？」

「せやね。ネギ君ちっこいし、大丈夫だと思うよー」

「ちよつ、このか!？」

「では決まりかの。仲良くするのじゃぞ〜」

「そんなあ……」

小さな頃から親が居らず、学園長の世話になっているアスナは逆らえない。がつくりと項垂れせめてもの反抗としてネギに文句を言うだけだ。

「くつ、美少年と一つ屋根の下になれる絶好の機会が……」

少し離れた場所では紬が悔しげに拳を握り締めそんなことを呟いていたのだが、誰の耳にも届いていなかったのは幸運だろう。

▽

学園長室で一悶着あったものの、とりあえず一行は教室へ向かう流れになった。

アスナとこのかは一足先に教室へ向かっている。その際、アスナは「私はぜつたいに認めないからね!!」と去り際に言い残していった。

「何なんですか、あの人は……」

ガキガキ連呼してくるアスナはネギとしてもあまり得意な相手ではなかったらしい。これからの教師生活に伴う不安も相まってネギの表情は浮かない。

「うふふ、あの子はいつも元気だからね。でもいい子よ」

そう言ってネギに微笑みかけるのはネギの指導教員である源しずな。ネギと違って立派な大人の女性で、それはもう色々のご立派な美人女教師である。

「宮本さんも、アスナさんと仲良くしてあげてね?」

「ええ、勿論。話してみても分かったけれど、悪い子ではなさそうですから。ネギ君とも最初の出逢いかたが悪かったただけだと思っしね」

何よりアスナもこのかも中々の美少女である。仲良くなれるのならそれに越した事はない。

しずなからクラス名簿を受け取って不安に胸を膨らますネギと、これから始まる新たな学校生活に期待を募らせる紬。このあたりは年

季の違いだろう。

「ここが僕のクラス……」

2年A組の扉の前に立って深呼吸を一つ。意を決してネギは扉に手を掛けた。

その様子を子供の成長を見守る親のような心境で眺めていた紬であったが、ふと扉の隙間に珍妙な物が挟まれていることに気づく。というか教師に仕掛ける悪戯の定番黒板消しであった。

紬の反応は早かった。頭上から迫るトラップに気づいていないネギの背後に歩み寄り、直撃する前に黒板消しを掴み取る。剣者たる紬からすれば造作もないことだ。

だが問題はその後であった。

シーンと静まり返る教室内。期待していた光景とは違う展開に生徒たちも反応に困っている。紬も微妙な空気を察してやらかしたことを自覚した。

「あ、やばっ……白けちゃったか?」

この場合は下手に手出しせず、流れに任せた方がよかったのかもしれない。しかし手を出さねばネギがトラップに引つかかっていたわけで、それを見て見ぬ振りするのは憚れた。

そんな微妙な空気の中、ネギは頭上で掴み取られた黒板消しを見て目を点にする。

「えっ、あー！これはアレですね！有名な黒板消しトラップ!」

呑気にそんなことを口にしながら無警戒に教室内へと歩みを進めるネギ。その足元に縄が張られていることにも全く気づいていない。

「待った、ネギ君。足元に――」

「――えっ」

足元など気にも留めていなかったネギは物の見事に縄に足を取られ、顔面から床に倒れていく。新任教師が入ってくると思えていた罠を仕掛けた面々は悲鳴を上げ、教室内が騒然となる。

ここでもやはり紬の反応は早かった。

縄と連動して落下してきたバケツを掴み取った黒板消しを投げて弾き飛ばし、顔面からダイブしそうになるネギに駆け寄りその身体を

片手で支える。もう一方の手には同じく縄と連動していただろう玩具の矢がいつの間にか握られていた。

生徒たちが唾然とする中、全てのトラップから見事ネギを守り切った紬は小さく吐息を洩らすとやや芝居がかった風に口を開く。

「中々に手の込んだ仕掛けとお見受けした。手厚い歓迎、痛み入る……なんて感じでどうかな？」

最後にちよつとした茶目つ気を交えて締め括った。

「「「かつ……」」」

「かつ？」

「「「かつこいいーっ!!」」」

鮮やかな紬の対応に目を奪われていた生徒たちが、紬の締めを皮切りに爆発もかくやの勢いでいつもの騒がしさを取り戻す。多くの生徒が教室前に躍り出てきてはあつという間にネギと紬を取り囲んでしまう。

「ねえねえ、さっきのどうやったの!？」

「というか、あなた誰？」

「中々の身のこなし、何者アルネ？」

「ねえ、そっちの子供はどうしたの?」

「わー、こつちの子も可愛いー!」

その勢い、波濤の如し。好奇心とバイタリテイの権化といっても過言ではない2年A組の生徒たちからすれば紬とネギは格好の獲物。さしもの紬も押し寄せる生徒の波に動揺を隠せなかった。

「うわっ、凄い勢い。私ってば一躍人気者になってたりして?」

……つて、どさくさに紛れてネギ君を搔つ払おうとしているのは何処の何奴!？」

「うひゃあー!？」

さり気なくネギに伸びてくる無数の手を相手に格闘しつつ、ネギは渡さぬとばかりに抱え込む。この様子を自分の席から非常に羨ましがな表情で見ているお嬢様が約一名いたりするのだが、さすがの紬もそこまで気は回らなかった。

熾烈なネギ争奪戦が勃発するかと思われたところでしずなが手を

鳴らし、興奮状態の生徒たちを落ち着かせた。ネギの指導教員に抜擢されただけあって生徒を御する手腕は見事という他ない。

しずなおのおかげで生徒たちもおとなしく席につき、改めてネギが教壇に立って自己紹介をする。

最初は子供であるネギが担任となることに生徒たちは驚きと戸惑いを禁じ得ない様子であったが、そこは賑やかし好きの2年A組。小学生在が教師になるなどという異常事態にもさして気を留めず、ネギのおっかなびつくりな挙動にはしやぎ始める始末だ。

「はいはい、静かにしてねみんな。まだ転校生の紹介が終わってないから」

いよいよ訪れた自分の手番。ネギと入れ替わりで教壇に立った紬は、これから同じクラスの仲間となる少女たちを見渡す。そしてできる限りの笑顔を浮かべて挨拶を始めた。

「初めまして皆さん。転校生の宮本紬です。気楽に紬ちゃんと呼んでくれると嬉しいかな。諸事情により一週間ほど登校が遅れましたが、宜しくね」

特に奇を銜うこともない至って無難な自己紹介。やや面白味に欠けたかと思われたが、生徒たちの反応は悪くなかった。拍手と共に好意的な声が返ってきたことに紬は内心で安堵する。

「よかった、問題なく馴染めそうです。しかし……」
拍手に対して精一杯の笑顔を返しつつ紬は内心で冷や汗を垂らしていた。

「(何だか何処かで見たような顔がちらほらあるんですけど？ それに、ぎつと見ただけでもかなりの遣い手がひーふーみー……五人はい。それに……あれって絡繰よね？ 生身じゃないわよね？ どうなってるのかしら、このクラス……)」

教壇に立って教室内を見渡したところで紬はこのクラスの異常性を把握した。明らかに普通の中学生を逸脱している雰囲気纏う者が数人いたのだ。恐らく、相手も紬が一般人でないことは既に悟っているだろう。

他のクラスがどんなものなのか分からないため何とも言えないが、

紬の中で2年A組は魔窟という認識が固まった瞬間である。

しかし魔窟であることを補って余りある要素が2年A組にはあった。

美少女、そう美少女である。2年A組の生徒は総じて美少女、可愛いどころが一杯だった。それはもう、内心で拍手喝采してしまうくらいには。

加えて担任がネギ少年である。これはもう観音様の導きでしかない、むしろそれ以外に何があるのかと紬は胸中で豪語した。

紬がどうしようもなく一人で滾っているといつの間にか授業開始時刻が迫っていたらしい。しずなが紬の席決めを始めていた。

「そうね、紬さんは席に希望はあるかしら？ 目が悪かったりするなら前の席の人と変わってもらうようにするけど」

「いえ、お気遣いなく。私は後ろの席で構いません」

むしろクラスメイトを思う存分見渡せる後ろの席がいいまでであった。さすがに開けっぴろげにそんなことは言わないが。

「じゃあ後ろの空いている席から好きな場所を選んでいいわ」

「はい、じゃああの金髪の女の子のとな……り……」

ノリノリで可愛い金髪の少女の隣を所望しかけて、紬は唐突に背筋を走った悪寒に身を震わせる。何か触れてはならない恐ろしいモノに触れかけてしまった、そんな感覚だった。

紬は悪寒の正体であろう金髪の少女を見やる。一番後ろの席を陣取る金髪の少女は、紬の視線に頬杖つきながら中学生とは思えないほどに妖艶な笑みを浮かべた。

「(あ、これ駄目な奴だ)」

即座に身の危険を察した紬が選んだ席は一番後ろの窓際、金髪の少女の正反対だ。

「そこにするのね、分かったわ。じゃあ席についてもらって、ネギ君、授業の方お願いします」

「はい、頑張りますー！」

ふんすつと気合いを入れて初授業に臨むネギ。そんな子供先生を応援しつつ席に座った。

その後、ネギの初授業がどうなったかを端的に語れば、走り出しはよかったものの最終的にはどんちゃん騒ぎのドタバタになってしまったとだけ記しておこう。

ネギ少年の道は前途多難である。

劍客少女とお嬢様

波乱に満ちたネギ少年の初授業が終わって放課後、紬のもとにはネギほどではないものの多くのクラスメイトが転校生恒例の質問責めをせんと詰め掛けていた。

紬としても早いうちにクラスに馴染みたいのもあつて次から次へと投げ込まれる質問の数々に丁寧な答えつつ名前を覚えていく。

質問の内容は出身から好きなこと嫌いなこと、彼氏はいるかや先の身のこなしについてなど多種多様。その中でも注目を浴びたのはやはり最後の質問だろう。

質問を投げかけてきたのは小麦色の肌を持つ明るい雰囲気少女。紬が相当な遣り手だろうと当たりをつけた一人だ。名を古菲という中華からの留学生である。

「紬は何か武術をやつてるアルか？」

スポーツや運動をすつ飛ばして武術と問うてきたあたり、彼女も何かしらの武術を嗜んでいるのだろう。それは面と向かいあつたことで確信が持てた。

「ええ、剣を振ったりしています。流派は『二天一流』、これでも腕には結構自信がありますよ？」

側に置いてあつた木刀入りの長袋を手に、自信に満ちた笑みを浮かべる紬。その発言に集まっていたクラスメイトが何だか凄い！とばかりに声を上げる。

気を良くする紬に古菲は好奇心と僅かな挑発を交えた笑みを浮かべた。

「なるほど。よければ一度手合わせしないアルか？　ちなみに私は中国拳法を嗜んでるアルよ」

「徒手空拳ですか。いいわ、むしろ望むところよ！」

劍者として生きる紬にとって強者との戦いはむしろ望むところ。

『宮本武蔵』が至った無空の境地に至るためにも、腕に覚えのある強者との立ち合い以上に修練と経験の積み重ねになるものはないだろう。

そんな中で古菲からの申し出。正に渡りに船、願ったり叶ったりという他ない。

今にもおっ始めそうな雰囲気の紬と古菲。その間に一人の女生徒が勢い勇んで割り入った。

「ちよつとお待ちになつてお二人とも」

火花を散らす二人の間に入ったのはお嬢様然とした雰囲気の少女。先の授業においてアスナとオジコンだシヨタコンだで争つたうちの後者、クラス委員長である雪広あやかである。

「古菲さん、親睦を深めるのはよろしいですが紬さんはまだ転校してきたばかりの身。まだ勝手が分からない状況でしようから、お手合わせよりも新しい環境に慣れることを優先するべきですわ。紬さんもそうではなくて？」

「むむ、確かに……」

紬はまだ麻帆良に來たばかりで何処に何があるのかも分からない状況。あやかの言葉にも一理あるだろう。

しかし折角目の前に用意された^{手合わせ}馳走を取り上げられるのは何とも言い難く、紬と古菲は揃つてご飯を取り上げられた子犬のような顔をする。

「そんな顔にしても駄目です。これは紬さんのためでもあるのですから。ところで紬さん、この後お時間ありませんか？ よろしければ私が校舎の案内をしてさしあげますわ」

「え、ほんと？ それはすつごく助かるけど、いいの？」

「勿論。私たちはもう同じ教室で学ぶ仲間ですもの。何より私はこのクラスの委員長。転校生がより早くクラスに溶け込めるよう務めるのは当然ですよ」

オホホホなんて如何にもお嬢様といった具合に笑うあやかであるが、その実ただの世話焼きな良い人である。実際、彼女はお嬢様であるがそれを鼻にかけることもなし、アスナ絡みの喧嘩とある嗜好にさえ目を瞑れば模範的な優等生だ。

「そうね、私もまだ麻帆良のことを把握できているわけではないから、校舎内だけでも案内してもらえるのは助かります。ご厚意に甘えさ

せてもらってもいいかな、あやかちゃん？」

「ええ、勿論！ ……ところで、そのちゃん付けはちよつと遠慮していただける？」

少しばかり恥ずかしげに言うあやか。中学生にもなって同年代からちゃん付けで呼ばれるのは少々面映ゆいものがあつたらしい。

「あ、いきなり馴れ馴れしかったか。ごめんね、どうにも癖で女の子にはちゃんを付けたくなつちやうのよねえ」

転生者である紬からすれば肉体的には同年代であつても精神的には年下になるため、どうしても相手にちゃんやら君を付けてしまう。こればかりは常日頃から意識しなければ治りようがない。

「と言うわけで、折角のお誘いだけど手合わせはまた今度。ごめんなさい、古ちゃ…古菲ちゃん」

親しみを込めて古ちゃんと呼びかけて止める。何となく、自分が誰かをくーちゃんと呼ぶのは色々和不味いと直感したからだ。こう、ピンの女王様的に。

「仕方ないアルね。手合わせはまた暇な時、楽しみにしてるアルよ」

古菲も転校してきたばかりの紬を気遣い、この場は大人しく引き下がった。

「では紬さん、早速行きましょう。麻帆良全体と比べれば小さなものですが、それでも中等部の校舎も広いものですから」

「そうね。善は急げとも言うし、さくつと校舎を見て回りましょう」

やや強引なあやかの態度に内心で首を傾げつつ席を立ち、あやかの先導のもと教室を出る。その際、あやかがクラスメイトたちに意味深な目配せを送っていたことに紬は気づいていたが、特に悪意も感じなかったので流した。



「——とまあ、こんなところでしょうか。部活動の類はご自分の目で確かめた方がよろしいでしょうから、また後日に回させていただきますが、案内すべきところは以上ですわ」

「うーん、田舎のオンボロ校舎とは比べ物にならないわね。特別教室の数だけでもうちの倍はあるし、さすが都会、学園都市というだけあるわ……」

粗方校舎内を回り終えた紬は転校前の校舎とは麻帆良の校舎の格の違いに圧倒されていた。

まず綺麗。隙間風は吹かないし、雨漏りもしない。設備も最新鋭といっても過言ではなく、教室の広さ一つとっても紬が通っていた中学とは比べ物にならないものだ。

「何と言ってもここは日本有数の学術都市ですから。それに我が雪広財閥も経営に携わっている以上、学生諸君が思う存分学業に励める環境を作り上げるのは当然のことですよ」

「雪広財閥……やっぱりあやかは生粋のお嬢様なのね。いえ、それはともかく。その心意気は素晴らしいものだと思います。まだ中学生なのに確固たる芯を持っているその在り方、心から尊敬致しますわ」
「そんな大袈裟でしてよ、紬さん」

ど直球な紬の言葉にさしものあやかも照れを隠せない。

「私、あやかとは何だかともって仲良くなれる気がするわ」

「ええ、それは私も同じですわ。こうして校舎をご案内して気づいたのですが、私たちってどことなく似ている気がして……こうシンパシーめいたものを感じるというか」

「あやかも？ 私もどことなく近いものを感じていたのよね。私たち、気が合うのかも」

笑顔でそんなことを口にする紬とあやか。あやかの親友といっても過言ではないほどに付き合いの深いアスナならば、二人の間に生じた共感シンパシーの正体に思い当たるかもしれないが、生憎と今はこの場がない。長谷川千雨ツツコも不在なため二人の謎の共感の正体は知れないまだ。

ただ、一言で二人の関係を的確に表すのならば——混ぜるな危険。

「さて、そろそろ戻りましょうか。いい加減、日も傾いてきたし」

「そうですね。そろそろ頃合いでしょう」

「ん、頃合い？ 何が？」

あやかの眩きに疑問符を上げて、紬は2年A組前の廊下に見覚えのある二人を認めた。ネギとアスナの二人である。

「あら、二人ともどうしたの？ そんなところで固まって」

「えうつ!? つ、紬さん!? ベ、別に何もありませんよ？ アスナさんにバレちゃったとかそんなことありませんから！」

「あ！ このバカ!」

パニックになって余計なことまで口走りそうなネギの口がアスナの手で塞がれる。しかし既に事の半分近くを口にしてしまった時点で紬とあやかの追及は避けられない。

「んー？ バレちゃったって何が？」

「ネギ先生、もしやそこのおサルさんに何か有らぬ弱みでも握られてしまったのですか？」

「誰がおサルさんよっ!」

ムキーツと顔を真っ赤にして怒るアスナ。そういうところがおサルなのでしてよ、とあやかが火に油を注ぐことで悪化。ネギと紬を蚊帳の外に本日二度目のキャットファイトが始まってしまった。

「あわわわっ、二人とも喧嘩はダメですよ!」

慌ててネギが止めに入ろうとするも無駄に身体能力の高いアスナと人並みに武道を修めているあやかが相手では割り込めない。仕方なしに背中 of 杖に手を伸ばしかけるも、それよりも先に紬が二人の首根っこを掴んで仲裁する。

「ここら、華の乙女が子供の目の前でみつともない。ネギ君も困っているでしょ？」

「うぐっ……」

「私としたことが、お恥ずかしい……」

何とか冷静に戻ったあやかは埃を払い、気持ちを切り替えるように咳払いを一つした。

「これ以上、ネギ先生にご迷惑をお掛けするわけにもいきません。今日のところはこのぐらいいにして、早くお二人を教室に案内しますわよ、アスナさん」

「……？ 案内？」

「……アスナさん。もしかしくなくても忘れていきますわね」

ほとほと呆れ果てたと言わんばかりにこめかみを押さえ、あやかがこれ見よがしに嘆息した。その態度にカチンときたのかアスナが言い返す。

「わ、忘れてなんかいないわよ？ アレでしょ、アレ？ ちゃーんと覚えてるに決まってるじゃない」

「アスナさん、忘れちゃったんですね」

「忘れてないって言ってるでしょ!？」

ネギの何気ない指摘にもムキになって反論する。その反応が如実に物語っていることに当人は気づいていない。

「はあ、もういいですわ。アスナさんは自分の手にある買い物袋が何なのかを思い出すまで廊下に立っただけでいいです。さき、ネギ先生、紬さん。どうぞこちらへ」

あやかに促されてネギと紬は互いに顔を見合わせ、それから最初と同じように教室の戸をスライドした。すると次の瞬間――

「二二」ようこそ！ ネギ先生！ 紬ちゃん！ 「二二」

鳴り響く無数のクラツカーと舞い散る紙吹雪、そしてこつちまで元気になりそうな歓迎の声。予想だにしていなかった展開にネギは呆然と立ち尽くし、紬は背中の中袋に伸ばしかけていた手を引き戻して照れ笑いを浮かべた。

「粹なことしてくれるじゃない、あやかか？」

「ふふつ。クラス委員長として、サプライズにも全力を注ぐのは当然ですわ。とは言え、私一人で企画立案したわけではなく、2年A組全員で用意した歓迎会ということをお忘れなく」

悪戯っぽく笑ってみせるあやかに紬も自然と笑みが零れる。自分で思っている以上に、紬は目の前の少女のことが気に入ったらしい。「お気遣いありがとうございます。目一杯、面白おかしく過ごさせてもらおうわ！ さ、行こうかネギ君？」

「はいー」

呆けていたネギを伴って紬は新たなクラスメイトたちと親睦を深めるべく、クラスの輪に溶け込んでいくのであった。

剣客少女とルームメイト

楽しく賑やかな歓迎会の時間はあっという間に過ぎゆき、やがてお開きと相成る。下校時刻となれば生徒たちは女子寮へと帰っていく。ちなみに男の子であるネギも帰宅する女生徒の集団にいるのは突っ込むまい。

さて、それより問題なのは紬の部屋である。もつと言えばルームメイトが誰なのか。これに関しては歓迎会の折に判明した。

——長谷川千雨。

紬をして魔窟と評する2年A組にあつて基本的にパツとしない生徒。むしろ自ら目立たないようにしているまでである。そんな彼女が自身のルームメイトであることを知つたのは歓迎会の際、片っ端からクラスメイトに声を掛けていった時に千雨が明かしてくれたからだ。「いやー、教えてくれて助かったよ、千雨ちゃん。私、まだ麻帆良のこととかさっぱりでさ、自分の寮も部屋も分からなかったのよ」

寮へと向かう道すがら、紬は積極的に千雨とコミュニケーションを取ろうとしていた。何せこれからクラスメイト以上に親密な関係となるであろうルームメイトである。できることならその関係は良好であるべきだ。

しかし——

「ああ、よろしく……」

千雨の方はあまり宜しくしたいわけではない。先ほどから何度か紬がアプローチをかけてもこの調子。あからさまに嫌われているわけではないが、明確に壁を作られている。

「千雨ちゃん、もしかして機嫌悪い？ いきなり私みたいな新参者と同室になつて迷惑だった？」

「別に、そういうわけじゃない。ただ、ちよつと……」

自身の構築する唯一無二の牙城に他人が立ち入ることにちよつと、いやかなり抵抗があるだけだ。

長谷川千雨は紬をして魔窟と評する2年A組にあつてかなりの常識人であると自負している。お転婆でお馬鹿で時に世間一般の中学

生を著しく逸脱しているクラスメイトとは違い、自分は普通をこよなく愛するただの中学生だと断言するだろう。

だが忘れてはならない、彼女もまた2年A組の生徒であることを。自覚なくとも彼女もまた、普通の中学生とはかけ離れた逸材である。

「ここが私の……私たちの部屋だ。荷物はもう届いてるからな」

素っ気なく言って一足先に部屋の中へ消える。やけに警戒の強い千雨の背中に疑問を覚えつつ、紬もまた部屋へと足を踏み込んだ。

部屋は二人で暮らす分には申し分ない広さ。内装はこれといった奇抜さもなく、女子寮の造りと同じ洋装。千雨自身があまり装飾の類を好まないのか少し殺風景に映るものの、特別散らかっていたりするわけでもないので問題はないだろう。

ただ一つ、紬の注意を強烈に引くものがあつた。部屋の隅に追い立てられたように固められた電子機器の数々だ。

前世の物と比べると非常に型は古く紬からすれば骨董品レベルの代物であるが、この時代においては最新式といっても過言ではないコンピュータが鎮座していた。

「うわっ、また随分と馬鹿でかい。この頃のデスクトップってほんと大きかったのよね〜」

「あ！ おい待て、それに触んな！」

一直線に己の秘密目掛けて突き進む紬の前に、千雨は焦りを表情に浮かべて立ち塞がる。

普通を自称し平凡な学生生活を望む千雨にとって自分の秘密が露呈するのは絶対に避けなければならぬ展開であつた。しかしこの時代よりも未来を生きた紬には、千雨の過剰な反応が今ひとつ理解できな

きない。

だから紬にとつては何気なく、こんな台詞を吐く。
「別に隠すようなことでもないでしょ？ 今どき……はどうか知らないけれど、うちのクラスの可笑しさと比べたら自分用のパソコンを持っているくらい普通じゃない」

「——え？」

愕然とその場で固まる千雨。今、何かさらつととんでもない発言を

された気がする。

「な、なあ宮本。今、うちのクラスが可笑しいって言ったか？」

「うん？ ああ、悪い意味じゃなくてよ？ 良い意味とも言い切れないですけど」

紬は古めかしい骨董品の検分の片手間に答えた。懐かしい代物を前に興味関心が完全に固定されてしまっているらしい。自分の後ろで千雨がどんな表情をしているのかも気づかないほどに。

「じゃあ、例えばだ。うちのクラスの連中だったら、具体的に何処がおかしい？」

「そうね、なんか中学二年にしては背丈にばらつきがあるというか、明らかに中学生に見えない子が居たわね」

お前が言うなという突っ込みが方々から飛んできそうではあるが、今の千雨にツツコミを入れる余裕はない。急かすように先を促す。

「お、おお。そうだな。他には？」

「ただの中学生とは思えないほどの遣い手がいることと、得体の知れない子がいること。後は……絡繰少女が生徒やつてることぐらいかしら……個人的にはぐつとくるけども」

最後にボソッと要らぬ言葉が付け足されたものの、都合よく千雨の耳には届かなかった。

「お……おおー！」

千雨、ルームメイトに一縷の希望を見出す。

今日に至るまで苦節十四年、麻帆良の非常識と異常の数々に頭を悩ませ、周囲との温度差に苦悩し続けていた。

明らかに異常なことを当たり前のように受け入れる麻帆良市民。千雨の苦悩を理解してくれる人間は側に居らず、千雨が理解者を求めたのは麻帆良の外の人間。幸い麻帆良外の人間の感性は正常だったらしく、千雨の体験談を聞いた者の大半は彼女を擁護してくれた。それが切っ掛けで千雨の趣味はパソコン関連になったのだ、

しかし今、目の前の転校生は麻帆良内に居てなお千雨と同じく異常を異常と認識している。つまり同志、仲間である。

身も蓋もないことを言ってしまうえば、転生者である紬以上に非常識

な存在もそうそう居ないのだが、それは言わぬが華だろう。

ともあれ、こんな形で理解者になり得る相手と邂逅できたことに浮かれてしまう千雨。故に気づかなかった。色々と漁っていた紬が千雨の趣味に繋がる致命的な証拠を探り当ててしまったことに。

「こ、これは——ッ」

「え、あつ!? バカお前それはっ!」

紬の手に握られる一枚の写真。そこに写るはフリフリの可愛らしい衣装に身を包み、万人を魅了するであろう笑顔を振り撒く可憐な少女の姿——

——コスプレ姿の長谷川千雨その人であった。

同志を見つけた喜びの表情が一転して絶望に染まる。最悪だ、選りに選って同志になり得るかもしれない相手に秘密がバレた。もう駄目だ、お嫁に行けないどころか明日から学校にも行けない。

「そ、その写真を返せえッ!」

絶望に身も心も堕ちていきながらも千雨は写真の奪取を試みる。否、もはや理解者も同志も必要ないと開き直り、全てを闇に葬らんがため鈍器（巨大な人参の置物）を片手に躍り掛かった。

しかしそこは剣者の端くれ。拙い殺気にも機敏に反応し、殴り掛かってくる千雨の手を取り瞬く間に取り押さえる。千雨の主観からは瞬きしたら床に押さえつけられていたようにしか思えなかっただろう。

「は? ちょっと、何が……」

「——千雨ちゃん。この写真の女の子は貴方で間違いない?」

混乱から抜け出す暇もなく鼻先に突き付けられるコスプレ^証写真^品。良くも悪くも普通の感性を併せ持つ紬の目は一発で写真の少女が千雨だと見抜いた。もはや言い逃れは出来得まい。

「うぐつ……ああ、そうだよ、私だよ! 悪いかチクショー! もう煮るなり焼くなり好きにしろっ!」

犯人、自供。これにて千雨の希求する普通な学生生活は彼方へと消え去った。一日もすればクラスメイト全員に知れ渡っているに違いない。千雨は目の前が真っ暗になった。

……が、忘れてはならない。此処にいるのはあの宮本武蔵の霊基を埋め込まれた少女。2年A組の賑やかし好きな面々とは一味違う。

今一度言おう。彼女の好きなものは美少年と——美少女である。

「いい……凄くいいわ……」

うつとりと、涎を垂らしそうな表情で紬が呟く。千雨は言いようのない身の危険を感じ取った。

「何て可愛らしいのかしら！ こんな逸材が目の前に居たというのに今の今まで気づかなかったなんて、何たる不覚っ。ああ、滾るわ……」

「み、宮本？ お前、何言ってる」

「千雨ちゃん、良ければ私にもこの姿を見せてくれない？ 勿論、生でっ！ あ、これ以外にも衣装があるならそれも見てみたいわ。和風装束とかあったりする？ フリフリ魔法少女みたいなのも悪くないけど、私的には和服とか千雨ちゃんには似合うと思うのよ」

火がついた紬はもはや暴走列車と変わらない。己の趣味嗜好を全開に突っ走る。その結果、千雨に「あ、こいつもクラスの中で同じ変人だ」と結論付けられていたとしても関係ない。滾る情熱のままに千雨に迫る。

「ね、ね？ ルームメイトからのお願い。千雨ちゃんの可愛い格好、見たいな」

「そんなこと言われたって、誰が見せてやるかつ！」

「ええ？ そんなケチくさいこと言わないでさ？ ……ふむ、あのクローゼットが怪しいと見た」

「なっ!？」

不味い、非常に不味い。紬が目をつけたクローゼットの中には千雨が集めてきたコスプレ衣装の数々が収納されている。そんな代物を暴かれようものならどうなるかは想像に難くない。

「させるかあ!？」

「おおう!？ ちよつと、千雨ちゃん待った——!？」

そこからはもう意地のぶつかり合いだった。

意地でも痴態を晒したくない千雨と可愛らしい千雨の姿を拝みたい紬の戦い。不毛な争いは外が暗くなっても続けられ、最終的には冷

静になった紬が半泣きの千雨に平謝りする結果に落ち着いた。
ともあれ、望んだ形とは些か異なるものの、紬は長谷川千雨との距離感を半ば強引に縮めることに成功したのだった。

劍客少女と拳法少女

一年で最も寒い時期と言われるのは一月であるが、二月になったからといって暖かくなるというわけではない。取り分け早朝は薄着で出歩くにはまだまだ寒さが厳しい季節だろう。

朝靄漂う時間帯。大半の生徒が未だ眠りに就いているであろう中、二人の少女が激しく鎬を削っていた。

目まぐるしく互いの立ち位置を入れ替え、交錯する度に劍と拳を交わし合う。決定的な一撃はどちらもなく、只々相手の隙を探っては潰し合う達人の戦い。よもや立ち合っているのがうら若い娘たちだとは思うまい。

「ふっ！」

「ハッ！」

何度目の接近か、間合いを一足で詰める。互いに劍と拳の射程距離^{リチ}内。ただ一度の誤りが勝負を決する。

気炎を吐いて繰り出される豪拳。様々な中国拳法を修める拳士の技は一つ一つが痛打成り得る。見た目以上にその拳が秘める威力は大きいのだ。

対する劍士は変幻自在の二刀流。下手な輩が真似すれば素人の棒振り以下に成り下がるそれを、未だ道半ばとはいえ遣いこなし、拳士を翻弄する。

されど拳士も然る者。神秘を知らぬまま、直向きに己の技を鍛え上げてきた少女の実力は劍士の予想を遥かに上回り、未だ決着は付かず示し合わせたように両者は間合いを開けた。

「ふう、やるねえ古菲ちゃん。正直期待以上、こんなにも心踊る試合になるとは思いませんでした」

野暮つたいジャージに身を包んだ紬が、心底嬉しそうに笑顔を零した。薄らと汗こそ滲ませているものの、呼吸は乱れていない。まだまだ序の口といった具合だ。

対する拳士こと古菲は紬ほど余裕ではなく、肩を小さく上下させながら白い息を吐いている。額には珠の汗を浮かべ、紬と違って疲弊し

ているのが目に見えた。

「よく言うアルよ。ろくに息も乱してない。紬こそ、只者じゃないアルネ」

「まあね。それなりに場数は踏んできましたから。でも、古菲ちゃんだってまだまだ奥の手を隠し持つてるでしょ？」

その指摘が凶星であり古菲の表情に微かな強張りが走る。

「別に非難しているわけじゃないのよ？　これはあくまで手合わせ。切り札はここぞと言う時にとっておくもの。それこそ、己の進退に關わる重要な時に切つてこそ真価を發揮する。古菲ちゃんの奥の手を見られないのは残念だけど、私も全てを出し切つていない手前、文句を言うつもりはありません」

あつげらかんと言つてのける紬に非難するような素ぶりはない。

これが侮られた上での出し惜しみであれば紬も苦言を口にしただろう。しかし古菲は立ち合い始めてから一度たりとも紬を手を抜くようなことはなく、本気で立ち向かってきた。故に、手札の秘匿を責めない。

それは古菲と違い、生き死にの懸かる修羅場を潜り抜けてきたからこそその価値観、あるいは余裕とも言ふ。

「アイヤ、実力だけでなく器の大きさでも負けた気がするネ……」

「あら、でも古菲ちゃん結構な器量良しだと思ふけど？」

さらつと気障な台詞を吐きつつ今一度構える紬。再び高まる剣気に引きずられて古菲も構えを取った。

「さて、本音は心の赴くまま限界まで立ち合いたいところだけど、そろそろ皆が目覚ます頃合いだからね。次で決着としましょう。そこで一つ、返礼として私の手の内を一つだけご覧に入れるわ」

「イイネ。真つ向から打ち破る！」

鬨気を滾らせ、気合いは十二分。必ずや打ち破つてみせると意気込む古菲は、ここまでの疲労を振り払って全神経を集中する。

相手が準備万端整えたと見るや紬は手にする二振りの木刀の内、やや短い方を腰に差し、残った一本を両手で握り締める。紬の十八番は二刀流であるが、二天一流は必ずしも二刀を使う流派というわけでは

ない。時と場合に合わせ、変幻自在に手の内を変えるのが二天一流の神髓だ。

故に一刀になったのは慢心でも油断でもなく、ただ一太刀に全てを懸けるという意味表示以外の何物でもなく。

「いざ——推して参るッ!!」

音高く大地を蹴って疾走する紬から繰り出されるは必殺の一撃。必ず打ち倒すという念を込めた剣撃が、昇龍の如く古菲を襲う。

されど古菲は微塵も動揺することなく、虎視眈々と逆撃カウンターの機会を狙う。

古菲の得意な戦法は待ちの一手。相手の必殺に合わせた渾身の一撃こそ彼女の十八番だ。

「獲ったネ——ッ」

木刀の軌道、紬の呼吸と足運び。全てを見切って完璧なタイミングを捕まえた。あとはそこに掌底を置くだけで勝ちが決まる。

「——え……う？」

動かそうとした足が、腕が止まる。止めざるを得なくなる。

いつの間にか喉元に抜き身の刃を突き付けられていた。微動たりでもすれば貫く、という殺気すらも感じられる白刃の切っ先。総身がかつて味わったことのない濃密な剣気に縛られる。

しかしそれも一瞬。瞬きをすれば喉元にあった刃は泡沫の如く消え去り、我に返った時には悪戯が成功した悪童のような笑顔の紬が目の前にいて。

「二本、いっただき〜!」

コツン、と木刀で額を小突かれたのだった。

▽

古菲の動きを止めたものの正体を明かせば、収斂した剣気による威圧である。

剣聖の剣気が物理的な影響を外界に及ぼすのと同じ。ただし紬の場合は相手の精神に負荷を与え、動きを止めるのが精一杯であるが。

それも格上相手には全くもって通用しない虚仮威しと変わりない。

だが疲弊の重なった古菲相手に、一瞬を争う戦闘の最中であればそれでも十分だろう。現に古菲は喉元に突き付けられる白刃を幻視し、最大の好機を逃したのだから。

「——とまあ、タネを明かせば単純なもの。要は気当てのようなものよ」

歓迎会の折にこっそりと取り付けていた手合わせの約束を果たし、結果として勝利を収めた紬は最後に見せた手の内について解説していた。

捉えようによっては自身の手札をごく丁寧に晒しているようなものだが、理屈さえ理解してしまえば誰にでもできるし対処も容易い小技だ。わざわざ隠し立てするようなものでもない。

「むむう、気当てでアルか。それにしても真に迫ったものを見せられたアルよ。心臓止まるかと思たネ」

「あはは、まあ剣神の領域に至るような人なら、剣気一つで相手の息の根を止めるくらいやってのけそうだけど、私はできて相手を怯ませるくらいだからね。それに、一刀に集中しないとあそこまで明確な幻を形作れないから、まだまだ修行が足りません」

「それでも十分アルよ……というか、剣士恐ろしいアルネ」

剣気一つ、威圧だけで人の命を奪えるなどもはやそれは死神か何かではないのか。古菲の中で剣士という存在が鬼門になった瞬間であった。

「それを言うなら私だって、拳士の恐ろしさを身をもって知ったわ。ちよつと掠っただけで内臓が揺さぶられるほどの掌打とか、どこの麻婆神父よ。ほんとヒヤヒヤしたんだからね?」

確かに此度の試合は紬の勝利に終わった。しかし必ずしも余裕の勝利だったわけではない。極限まで鍛え上げられた中国拳法は惜しくも届かなかったものの、秘める力は紬を倒して余りあるものであった。

それでも古菲が敗北したのは実力差以上に経験の差。実戦経験の有無が勝敗を左右した。

もしも古菲が十分な実戦経験を積んでいたのなら、剣気如きで怯むはずもなかった。ペース配分を誤って息が上がってしまうこともなかっただろう。

だが無茶苦茶な強さを誇るものの古菲は一般人。裏の世界を知らず、ただ直向きに拳法を磨いてきた少女に死合の経験を求める方が可笑しいというものだ。

「しかし、これで麻帆良の武道四天王の一角が落ちたアルネ」

「武道四天王？」

耳慣れない単語に紬が首を傾げる。

「うむ。私を含む刹那、楓、真名の四人で武道四天王。クラスの連中が付けた総称ネ」

「なるほど。確かに何れも武道四天王の名に違わない強者の気配を漂わせていたけど……というか、うち二名は知ってるんだけどね」

「む、そうだったか。ちなみに誰と誰を知ってるアル？」

「楓と真名よ。あの二人とは五年くらい前にひよんなことから出会して、流れで戦ったというか逃げ回ったというか、あの時は生きた心地がしなかったわね……」

その時の情景を思い出しているのか、見る見るうちに紬の目が濁っていく。よほど酷い目に遭ったらしい。二度とは同じ目に遭いたくないと顔が雄弁に物語っていた。

「何があったかは聞かないアルね」

「ええ、そうしてください。ほんと、よく生き延びたものよ……」

嫌な記憶を追い出すように頭を振り、努めて明るい声音で話を切り替える。

「ところで、今の話によると刹那ちゃんも武道四天王の一人なのね？」

「そうネ。刹那も強いアルよ？」

「ええ、承知しています。一目見た時から気になってたもの。なんて言っちゃって彼女、剣士でしょ。同じ剣士として気にならないはずがないわ」

古菲との手合わせは非常に有意義なものであった。間近で中国拳法の極みを拝めたのは僥倖といっても過言ではない。だが、彼女は拳

士であつて剣士ではないのだ。

どうせ交えるならば拳ではなく剣がいいというのは贅沢だが、すぐ側に相応の剣士がいるとあらば黙っていられない。既に古菲との手合わせを終わらせた以上、紬の狙いは剣士たる刹那に固定されている。

「紬は武道四天王を制覇するつもりか？」

「いえ、別にそういった意図はありません。名声とか興味ないし、そんなことより可愛い女の子と親睦を深めた方が何倍も有意義だから。けれど——」

一瞬、常日頃から余裕に満ち溢れている紬の表情に、剣鬼の色が滲み出た。

「——腕に覚えのある剣士であれば、立ち合わずには居られない」

無意識の内に洩れ出たのであろう剣気が古菲の背筋を撫ぜる。先ほど向けられものよりも更に研ぎ澄まされた抜き身の剣気に、古菲は軽く寒気を覚えた。

どこか別人のような空気を漂わせる紬であつたが、それも数瞬。ハッと我に返ると気恥ずかしげに照れ笑いをする。

「なんてね。ちよつと大仰な言い回しになっちゃったけど、要は腕試ししてみたいだけだから」

「腕試し、その気持ちは分かるネ。じゃあ紬は刹那に試合を申し込むアルか？」

「そうするつもり。でも、受けてくれるかしら？ 何となくだけど、断られるような気がするのよねえ」

「そればかりは刹那次第アルネ。受けてもらうまで頼み続けるヨ」

「うん。最悪、鯉口……はないから、剣氣の一つでも飛ばして辻試合を仕掛けたりして……」

「それは人としてどうかと思うアル」

「あ、あはは。冗談ですよ、冗談。もう、本気にしちゃつて！」

ジト—つとした眼差しに慌てて撤回する紬。しかしどうも信用ならないのか、古菲のジト目はしばらく続く。視線の圧力に耐え切れなくなった紬は話を逸らすことにした。

「そうだ！ 古菲ちゃん、よかったら朝餉を食べていかない？ 実家から送られてきたうどんが沢山あってね。好きだしとつても美味しんだけど、如何せん量が多くて……千雨ちゃんにも『こんなに食い切れるかっ！』と言われちゃいました」

いやあ困った困ったと紬は頭を掻く。

あからさまな話題の転換であるが古菲も腹が減っていたところ。いつもはルームメイトが作る中華料理やら超包子の肉まんであったが、偶にはうどんも悪くないだろうと誘いに乗る。

「うむ、ではご相伴にあずかるネ、でも千雨に許可は取らなくていいアルか？」

「大丈夫大丈夫、うどんを消費してくれる助っ人だって言えば問題ないはずだから」

そんなはずはないのだが、実際うどんの量も凄まじいので何だかんだ愚痴を言いつつも彼女は受け入れてしまっただろう。昨夜の一件で色々線引きが甘くなってしまうているのもあるかもしれない。

そんな経緯で二人はシャワーで汗を流した後、やや不満げな千雨を交えて朝っぱらから鍋を囲んでうどんを食べたのだった。

「朝から鍋でうどんとか、おかしいだろ……」

「よくよく考えると重たいネ」

「ええ？ そんなことないと思うけどなあ」

そんな緩い朝食風景が展開されたとかどうとか。

剣客少女と剣道少女

ネギ・スプリングフィールドが教育実習生として2年A組の担任となつて二日目。さすがに昨日の今日で勝手を把握したというわけにもいかず、今日も今日とてネギは2年A組に大苦戦である。

それでもネギなりに先生らしく勤めようと頑張り、何故か神楽坂明日菜の服が吹き飛ぶなどというハプニング？ は起きたものの、何とか無事に授業は終了した。

紬は授業合間ごとにクラスメイトと言葉を交わしては親睦を深めつつ、如何にして刹那に手合わせを申し込むか思索していた。見る限り、彼女はあまり2年A組の馬鹿騒ぎに便乗するタイプではない。勢いで挑んでも断られるオチが目に見えている。

「というわけで、どうすればいいと思う？ 千雨ちゃん」

「どういうわけで私に相談するんだよっ！」

昨夜の段階で2年A組に編入するに相応しい変人ぶり披露してみたルームメイトに、千雨は心の底からそう返す。紬はきよとんと小首を傾げた。

「だって千雨ちゃんルームメイトだし……ごめんなさい、冗談です。だから本気で嫌そうな顔をするのはやめて千雨ちゃん」

さしもの紬も二日で絶縁されては堪らないと頭を下げる。若干不機嫌そうに眉根を寄せながら、千雨は一応話を聞く態勢を取った。

「ええとね、これは私の個人的な見解なんですけど、千雨ちゃんはこのクラスのことを誰よりもよく見ていると思うのですよ。少なくとも、新参者の私よりは遥かに詳しく」

「……なんでそう思うんだよ」

やや不服げに頬杖を突きながら千雨は続きを促す。

「だって千雨ちゃん散々愚痴っていたじゃない。私的に言わせてもらうと、愚痴は相手のことをよく知っているからこそ零れ出るものだと思うてるの。つまり、千雨ちゃんはこのクラスのことを誰よりも把握している、そう判断したままです」

「……………」

千雨の反応は無言。しかし内心では紬の言葉に納得していた。

昨夜は紬が理解者に成り得るかもしれないと早合点して大変な目に遭った。最終的には落ち着き、謝り倒す紬に日頃の鬱憤をぶつけたりもしたのだが、どうやらそこから千雨が2年A組に精通していると判断されてしまったらしい。

非常に業腹ではあるものの、実際、新参者の紬と比べれば2年A組の面子については詳しいだろう。下手をすればクラス委員長であるあやかよりも把握しているまでである。

異常だ何だと目を背けているつもりで、その実しつかり見ていた。いや、ただ非現実的なことから目は逸らしていただけで、冷めた視点であってもクラスメイトのことはきちんと見ていたのだ。

だがそれを素直に認めるのは癪でいつそ突っ撥ねてやろうかと考えるも、真っ直ぐな紬の眼差しにやがて折れた。

「はあ……桜咲は性格が真面目だから、気を銜わず正攻法できちんと手順を踏めば断らないと思う。あいつ、剣道部だろ？ そっち方面から試合でも何でも申し込めばいいじゃねーか」

「なるほど。剣道、剣道かあ。これでも道場主の娘ですから、一通りの礼儀作法は心得ているけど、剣道の試合で満足できるかどうか……いいえ、何事も段階が大事ですもの。ここは慎重に事を運ぶとしましょう！」

うむ、と満足げに頷いて紬が千雨に微笑みを向ける。

「ありがとう千雨ちゃん。おかげで助かりました」

「……貸しーだぞ」

せめてもの抵抗にそう言うと、紬は屈託無い笑顔で頷いた。

「ええ、分かりました。貴方が困っている時、私で力になれることがあれば必ずや応えましょう。というか、貸し借りなしにじゃんじゃん頼ってくれていいからね」

惚れっぽく頼られるのが好きという奇特な性質タチの紬にとって、貸し借り抜きにクラスメイトでありルームメイトである千雨が困っていたら手を貸すのはやぶさかではない。

「さて、問題はいつ切り出すか。剣道部自体との兼ね合いもあるで

しようし、今すぐにといいのは迷惑になるかな。とりあえず刹那ちゃんに部活動見学をしたい旨を伝えて——」

紬がぶつぶつと作戦を練っていると教室に飛び込んでくる小さな人影。我らが子供先生、ネギ・スプリングフィールドが何やら怪しい液体に満ちた小瓶を片手にアスナへと駆け寄っていく。

「ありや、ネギ君。どうしたのかしら？」

気になった紬は千雨に一言断り、ネギとアスナの方へ足を向ける。千雨は興味関心を持たないようにしているのか、それとも第六感的なもの何かを感じ取ったのか、そそくさと帰り支度をする。教室を出ていく。馬鹿騒ぎが嫌いな彼女らしい対応であり、今回においてはそれが最善の選択であった。

「ネギ君、アスナちゃん。二人とも何してるの？」

何の考えもなしに近づいた紬の目の前でネギがアスナの手によって小瓶の液体を飲まされた。目を白黒させてゴクゴクと嚥下させられ、ついには小瓶の中身は空っぽになる。

「ちよつ、ネギ君。だい……じょう……」

ケホケホつ噎せるネギを心配して歩み寄ろうとした紬の足が止まる。何やらアスナがネギに対して文句を言っているが、その声も徐々に遠くなっていく。

「……………」

ぽけーっと立ち尽くす紬。瞳は熱に浮かされたかのように潤み、只々目の前にいるとびっきりの美少年に固定されている。

胸が締め付けられるように苦しい。どうしてこんなにも目の前の少年が魅力的に感じるのか。いや、元々守備範囲ど真ん中の美少年ではあったのだが、それがどうしてか今日に限って常の万倍も魅力的に見えた。

「ネギ君♡」

「先生、どうぞコレを……」

「ぎゃー！ 先生♡」

このかを筆頭に怒涛の勢いで迫る女生徒たち。予想外の展開にネギは抵抗する間も無く揉みくちやにされてしまう。

「ネギ君……」

「またもやとんでもない騒ぎになりつつある中、紬もまた蜜に誘われる蝶のように足を踏み出しかけて、ハッと我に返る。」

「——っ、もう駄目、煩惱断つべし。ネギ君相手に何を考えているのよ、私は……ちよつと冷水でも浴びて頭冷やしてきましよう」

ピンク色の靄を追い払うように頭を振り、何とか平静に立ち戻る。その足で女子寮へと向かい始めた。

「それにしても、さっきのネギ君はやたらめったら凛々しくて可愛らしかったなあ……朝とはまるで別人みたいだったけど、何があつたのかしら？」

はてなと首を傾げつつ紬は下校するのだった。

一方のネギは飲まされた惚れ薬の効果が消えるまで、何故か影響を受けないアスナと校内で生徒たちと追いかけてつこを練り広げることになった。

▽

麻帆良女子中等部は全寮制であり、数百人近い生徒が同じ建物内で暮らしていることになる。当然、風呂場の類は相応の大きさになるわけで、一度に百人が入っても問題ないほどの規模を誇る。もはや大浴場ではなくスーパー銭湯だ。

「ふう〜いい湯だなあ〜」

「年寄りくさいぞ」

「ひ、酷くない千雨ちゃん？」

洗い場で体を洗ってからゆったりと湯に浸かる。一日の疲れが洗い落とされていくような心地に、思わず洩れた感嘆の声を年寄りくさいと言われ、一応現役ピチピチの紬はシヨックを受けたように肩を落とす。

浴場内には紬と千雨の他に2年A組の面々が勢揃いしていた。偶然の産物らしいが、何にせよ集まれば喧しくなるのがこのクラスの特徴である。

紬と千雨から少し離れた場所ではネギと相部屋になる権利をかけて胸の大きさを競い合うなどという不毛な争いが繰り広げられている。それも後から浴槽に入ってきたクラス一、二のプロポーシオンを誇る龍宮真名や那波千鶴の参入で一時的に鎮静した。

「真名と楓も大概だけど、うちのクラスはほんとに中学生なのか疑わしい人だらけよねえ……」

「お前が言うな、お前が」

他人事のように呟く紬であるが、彼女も中学生にしては色々と豊かに育っている。

大学生とまではいかないが、普通に高校生でも通用する背丈。鍛えているために体は引き締まっており、無駄な肉が一片たりともない。その癖、母性の象徴だけは千雨が恨めしい目つきを送るほどにたわわと実っていた。

「あはは、それほどでもあるかな。でもまあ、まだ常識的な範囲内でしょう？」

「どうだか」

不貞腐れたように口元まで沈んでいく千雨。そんな可愛らしい仕草に紬が軽く身悶えているのだが、幸せなことに当人は気づかなかった。

そうこうしているうちに胸の大きさ勝負が大袈裟になっていき、いよいよ收拾がつかなくなっていく。その段階で馬鹿騒ぎに乗るつもりのない面子はさり気なく距離を取り始める。その中には、桜咲刹那の姿もある。

「よし、じゃあちよつと行ってくるね」

「……………」

千雨の呆れ混じりの視線を背中に受けつつ紬は真っ直ぐ刹那のもとへ向かう。彼方も、視線と近づいてくる気配に気づいて顔を上げた。

紬は要らぬ警戒を持たれないように気を払い、努めて笑顔を繕って口を開く。

「こんばんは、刹那ちゃん。ちよつと時間を頂いてもいいかしら？」

唐突な申し出に刹那は戸惑いを見せるも、僅かな逡巡の後に頷いた。

「はい、構いませんが」

「ありがと。隣、座っても?」

「ええ、どうぞ」

刹那の了承を得て一人分の間隔を空けて並ぶ。浴槽の壁に背中を預ける形で座って、紬は早速とばかりに本題を切り出す。

「実は刹那ちゃんにお願いがありました」

「お願い、ですか……?」

疑問符を浮かべて刹那が首を傾げる。いったい何をお願いされるのか、全くもって見当がつかない。

微かに身構える刹那に紬はお願いの内容を明かす。

「剣道部の見学をしたいんだけど、案内とかをお願いされたくないかな?」

「は? 剣道部の見学ですか?」

身構えていた割に何てことのない内容に刹那は肩透かしを喰らう。もつとこう、果し合いやら決闘の申し込みでもされるのではないかと予想していたのだ。

「別に構いませんが、何故わざわざ私に? 直接部室か武道場を訪ねてくだされば見学くらいいつでもできますよ?」

「そりゃあ顔見知り案内してもらった方が気が楽ですから。それに——見学だけじゃ物足りなくなった時に、相手がいないと困るでしょ?」

「——ツ!」

一瞬、ほんの僅かに紬の身から洩れ出た剣気に身体が反応しかける。だが手元に愛用する得物がないこと、何より紬が剣気を引っ込めたことでこの場は穏便に収まった。約三名ほど、敏感に紬の剣気に反応した者がいたがそちらは割愛しよう。

「ごめんなさい、決して邪な思いがあるわけではないの。あくまで剣道のルールに則った上での手合わせをしたい。駄目かな?」

先の剣気がまるで嘘のように刹那の顔色を窺う紬。臨戦態勢に入

りかけていた刹那はその態度にとりあえず肩の力を抜き、どうしたものかと思案する。

本音を言えば断りたいところである。諸事情があつてとある人物を遠ざけている刹那は、あまりクラスの輪に馴染もうとしていない。一步引いた立ち位置を保っていた。

しかし同時にとある人物の護衛役である刹那は、護衛をする方の身に近づく不穏分子の排除をしなければならぬ。そう、例えば――實力不明の転校生である紬だ。

必ずしも紬が敵と成り得るとは限らない。だが確かめる必要があつた。果たして彼女は自身が敬愛する方に仇なす存在なのか否か。

この申し出は紬が敵なのか違うのか見極めるのにまたとない機会だ。ならば刹那の出す答えは決まっています。

「分かりました。私の方から見学と体験については話を通しておきます。早くて明後日になるでしょうが、手配が整ったらまたお知らせします」

「ありがと、刹那ちゃん。楽しみにしています！」

声音を弾ませて紬はその場を離れていく。その足取りは玩具を買い与えられた子供のうように軽やかであった。

戻った先で千雨にサムズアップをして見せる紬。そんな少女の姿を刹那はやや警戒を滲ませた表情で見つめていた。

剣客少女と剣道部体験

紬が剣道部の見学を申し込んでからきっかり二日。その間、成績不振者を対象とする居残り勉強などといったイベントがあったものの、幸い紬の成績は前世知識もあつて悪くない。バカレンジャーの仲間入りは避けられた。

刹那は言葉通り、剣道部の主将と顧問に見学と体験の旨を伝えて了承を得た。おかげで紬は前もつての伝達により剣道部員たちから奇異の目を向けられることもなく、放課後の部活動風景を見学することができている。

「どうでしょうか？　これがうちの練習風景ですが」

一応の案内役として側につく道着姿の刹那が尋ねてくる。紬は特に感慨もなさそうに答えた。

「どう、と言われましても。うちの道場の練習風景もこんな感じだったなあ、ぐらいしか。あんまり目新しくはないかな」

床張りの道場内で女生徒たちが竹刀を手に素振りをしている光景は紬にとって珍しいものでもない。実家が道場である以上、自分も門下生の一人として道場内で練習していたのだ。途中から誰一人として練習相手が務まらなくなつて最終的には常に自主鍛錬という状況になつていたが。

「刹那ちゃんもあそこに加わつて練習しているの？」

「はい。いえ、私の場合は色々と事情があつて毎日顔を出せるわけではないのですが、概ねその通りです」

主にある人を陰から護衛するため、刹那が部活に顔を出す頻度はあまり高くない。だからと言って剣道部内で浮いているというわけでもなく、部活内の誰よりも上手いために臨時の教師役のような位置づけとして重宝されていたりする。

生徒たちが熱心に練習に打ち込む姿勢を微笑ましいものを見るような表情で眺める紬。やがて素振りが終わり、基本と応じ技の反復練習へと移行。それも終わるといよいよ打ち込みや掛かり稽古が始まった。

竹刀と竹刀を打ち合わせる音が道場内に響く。ここまで大人しく壁際で練習風景を見学していた紬であったが、動きが出てきたことでそわそわと落ち着きがなくなっていく。いよいよもって物足りなくなってきたのだ。

「刹那ちゃん、この後は確か地稽古があるのよね？」

その問いに刹那は静かに頷く。この後の展開が嫌でも読めたがため、表情にやや強張りが生じる。

そんな刹那の心境など知らず、紬はかねてから待ち侘びていた刹那との手合わせを申し込む。

「体験させてもらってもよろしくて？」

「構いません。元よりそのつもりで打ち合わせていますから。防具の類はどうしますか？ 一応、お貸しできますが」

「竹刀だけで構いません。わざわざ防具を借りるのは悪いしね。それに、刹那ちゃんなら寸止めくらいいけないでしょ」

不敵な眼差し。それくらいはできる技量を持ち合わせているだろう、と目が問いかけていた。

無論、刹那ならば寸止め程度造作もない。分かりましたと一言告げ、主将に体験をする旨を伝えに行く。

するとどうだ。主将が一声上げると稽古に励んでいた生徒たちが手を止め、壁際へと捌けていく。てつきり道場の一面を間借りして打ち合うものと思っていた紬は、やや驚きの目を刹那に向けた。

刹那は少し困ったような申し訳なきような表情で口を開く。

「すみません。彼の有名な『二天一流』を修める剣士が見学したいと仰っているとお伝えしたら、皆さん是非見てみたいということ。この通り、竹刀も二本用意してあります」

そう言う刹那の両手にはご丁寧にも大刀と小刀の竹刀が握られていた。

「ありや、わざわざ小刀も用意してくれるとは思わなかったなあ」

今回に限っては一刀流で臨むつもりであったが、わざわざ用意してもらったとあっては断るわけにもいくまい。何より、壁際から送られる期待に満ち満ちた視線を裏切るわけにはいかない。

「では、有り難くお借りします。皆さん、ありがとうございます！」

前もって準備してくれたこと、場所を空けてくれたことの感謝を伝え、紬は二振りの竹刀を受け取る。木刀とはまた違う感覚ではあるものの、比較的慣れ親しんだ代物。軽く素振りをして馴染ませると早速紬は構えた。

「此方は準備万端、刹那ちゃんは？」

「いつでも構いません。よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくね」

一刀を両手で握り締める刹那と二刀を手に構える紬。剣道部員に見守られる中、二人の地稽古とは名ばかりの手合わせが始まった。



最初の一手は紬からであった。

紬は右手に握る大刀の先をゆらゆら揺らしながら摺り足で躡り寄る。あからさまに誘っている構えであるが、刹那は釣られない。冷静に一本を狙う。

刹那を釣れないと悟るや否や紬は一気に方針を変更。脱力状態からの急加速で彼我の距離を詰め、大上段からの大振りを繰り出す。

しかし見え見えの一撃。刹那は焦らず回避しようとして、なおも接近してくる紬に驚愕する。

面を狙うにしても、近すぎる懐の深くにまで踏み込む必要はない。むしろ間合いを詰め過ぎれば技の選択肢が狭められてしまう。それなのに紬が肉迫してくる理由を刹那は即座に悟った。

「せいっー」

猛烈な勢いで迫ってくる小刀の横薙ぎ。リーチの短い小刀だからこそ、超至近距離でも問題なく振るえる。端から紬の狙いは大刀による振り下ろしではなく小刀による奇襲だったのだ。

セオリー通りの二刀流であれば小刀を攻勢に用いることはない。だが、だからこそ使えば相手の意表を突ける。狡い手口ではあるがなんでもやるを信条とする二天一流からすれば正しいだろう。

「くっ……」

虚を突かれて僅かに動揺するもそこは達人。上体を逸らして横薙ぎをやり過ごし、一度間合いを広げようと飛び退く。

「逃すかつー!」

折角詰めた間合いを広げられまいと紬は勢いそのままに刹那に追い継る。如何に刹那と言えど加速している状態の紬を振り払うことはできず、息つく暇もない小刀の連撃を往なすだけで手一杯になってしまう。

「強い……何より、戦い慣れしている……ッ」

「お褒めに預かり光栄ですわ。そう言う刹那ちゃんも、この間合いでよく凌ぐ。ここまですぐに入ったらすぐに終わるのが大半なだけどね」

小刀がそのリーチ^{長所}を最大限に発揮できる距離ではまともに大刀は振れない。できて小刀の軌道を逸らして受け流すことだけ。一方的に攻められる状況は変えられない。

紬もまた大刀を無闇に使えないのは同じであるが、彼女の場合は小刀がある。何より、使えなくとも時折チラつかせては牽制として利用していた。それもあって刹那は迂闊に攻勢に転じられないのだ。

だが、このままではジリ貧。打って出なければ手も足も出ずに負ける。ならばと刹那は押され続けていた体勢から一步踏み出す。

「はあッ!!」

「なんのー!」

小刀の一撃をやや強引に掻い潜り、すり抜けざまに胴を狙う。起死回生の一撃は空いていた大刀で防がれてしまっても刹那は小刀の間合いから脱することに成功した。

「やっるう、さすが刹那ちゃん。私の見込みは間違ってたわけね」

距離を離されてもなお紬の余裕は崩れない。ただし相好は心底嬉しそうに崩れていた。

刹那は若干乱れかけた呼吸を整え、改めて目の前の剣客と対峙する。

「二天一流、お見それいたしました。正直、危なかつたです」

「そう？ いやあ、照れるなあ。刹那ちゃんもさすがのお手前、何か流派とかはあつたりする？」

「流派、ですか……」

あるにはある。しかしそれを明かすには目の前の相手が信用足りうる人間かどうか判断しなければならぬわけ。

「ん？ またぞろ警戒されてる？ 私、刹那ちゃんと何処かで会ったことあるかな？」

「いえ、転校初日が初対面で間違いないと思いますよ」

「そうよね。刹那ちゃんみたいな可愛い子と出逢ってたら絶対忘れないもの」

「か、可愛いですか……」

あつけらかんと告げられた賛辞に僅かに狼狽える。勝負の真つ最中にも関わらずそういった言葉を吐くのが紬だ。ただしその間でも狡猾に相手の隙を狙っているのだから性質タチが悪い。

「面識がない、ということとは刹那ちゃんが私を警戒するのには他に理由があるわけで……何かしら？ それに、さつきからなーんか引つかかるのよね……」

喉に小骨が刺さったような違和感に首を捻る紬。どうにも刹那の戦い方は剣者らしさが薄いというか、強者であることに違いはないがどこか違う。そこが気になって仕方ないらしい。

「ま、いつか。続けましょう。打ち合っていれば分かることもあるだろうしね」

拭えない違和感は横に置き、再び彼我の距離を詰めに行く。同じ手は喰わないと刹那もまた攻めにかかる。

小刀の間合いに踏み入れられる前に大刀の間合いで打ち合う。竹刀と竹刀が激しく衝突し、音高く道場の空気を震わす。手数之差で若干刹那が押され気味なもの、一方的に攻められるような展開は避けられた。

苛烈な攻防の最中、紬は刹那の戦い方に注目していた。

「んー、獲物は太刀よりも長い……大太刀か」

「え……!？」

ボソリと呟かれた言葉に驚愕の声が洩れる。しかし手は止めず、二人は更に剣撃の速度を上げていく。

「想定敵手は人じゃないわね。妖物魔物の類……そう言えば京都に妖怪退治の専門家が居るとか居ないとか親父殿が言ってたっけ。刹那ちゃんの流派ってそこ？」

「っ……!?!」

あり得ない。本来の得物ですらない竹刀での打ち合いで自身の情報に次から次へと流れていく。恐怖以外の何物でもない。

紬が敵成り得るか見定めるつもりだったのに、立場が逆転してしまっている。竹刀を振るえば振るうほど自分という存在を見透かされてしまう。これ以上は、拙い――

「そう……そういうこと。違和感の理由はこれか。六割方は読めたかしら」

唐突に紬が竹刀を操る手を止めた。合わせて刹那も攻撃の手を止めるが、その表情は焦燥に塗れている。

「宮本さん、あなたはいったい……」

「ありや、余計警戒されちゃった？ 何処ぞの侍の真似をしてみたけど、慣れないことはするものじゃなかったか」

相手を知ること警戒の理由を探ろうと見様見真似の猿真似で剣筋を読んだ結果、余計に警戒心を持たれては本末転倒もいところだ。しかし警戒心を抱かれてはしまったものの、その理由については察しがついた。

得体の知れないものを見るような目を向けてくる刹那に、紬はことさら微笑んでみせる。

「そろそろ終わりにしましょうか刹那ちゃん。あまり長いこと道場を占拠するわけにもいかないし、これ以上は剣道の試合では推し量れない。続けるとしたらそれはもう剣道の試合ではなくなってしまうの」

竹刀を下ろし紬は完全に戦意を引つ込めた。刹那もこれ以上の続行は剣道の枠組みを越えると納得し、警戒は解かぬまま竹刀を下げた。

お辞儀を交わし二人の稽古とは名ばかりの手合わせが終わる。途端に外野で観戦していた生徒たちが感極まったように拍手喝采を上げた。

惜しみない拍手と賞賛の声を浴びながら紬は刹那に歩み寄ると手を差し出す。

「お疲れ様、刹那ちゃん。私の我が儘に付き合わせてごめんね？」

「いえ、そんなことは……」

部員たちの手前拒むわけにもいかず、刹那は差し出された手を握り返した。するとそのタイミングを計ったように紬が顔を寄せる。

「刹那ちゃん、このあと時間ある？ よかったらお茶でもしません？」

聞きたいこと、あるんでしょ？」

「——っ」

このタイミングでの紬からの申し出は刹那にとって甘い罠にしか思えない。それほどまでに刹那の中で紬は得体の知れない存在になっているのだ。

しかし手合わせを終え握手を交わす目の前の少女からは悪意の類は感じない。何も知らなければただのお茶の誘いに過ぎなかつたらう。それはそれで断っていただろうか。

受けるか断るか、熟考の末に刹那は覚悟を決める。毒を食らわば皿まで、危険かも知れないが刹那は誘いに乗ることにした。

「分かりました。お付き合いさせていただきます」

「おっ、そうこなくっちゃね。じゃあ、行きましようか」

そう言っつて破顔する紬は本当にただの中学生にしか見えなかつた。

剣客少女と放課後ティーブレイク

剣道部員たちによる嵐のような勧誘の声を丁重にお断りし、剣道場を後にした二人は商店街へと繰り出した。ちなみに刹那はもう少し紬を説得するという名目で抜け出してきた。

麻帆良の街並みは校舎に合わせてヨーロッパ風になっている。加えてやたらめったら広い。生徒ですら学園都市の全てを把握している者は少ないほどだ。

そんな商店街の一面にある喫茶店。オープンテラス席で紬と刹那は放課後ティーブレイクと洒落込んでいた。

「んー、あんまり紅茶とかは飲んだことなかったんだけど、案外悪くないかも。今度ネギ君に色々聞いてみようかしら」

白磁のティーカップを傾けて呑気にそんなことを呟く紬。最初はお茶屋さんがないかと商店街を練り歩いたが見つからず、仕方なく適当な喫茶店に目をつけたのだが存外悪くなかったらしい。

ほうとうと息を吐く紬の対面にいる刹那は片時たりとも視線を逸らさず、いつ何が起きても対応できるように身構えている。注文した紅茶にも口を付けていない始末だ。

さすがに居心地の悪さを感じて紬は苦笑いする。

「あのね、刹那ちゃん。警戒されるようなことをした私が言うのも何ですが、そんなに肩肘張られちゃうと私も話し辛いのです。もう少し肩の力を抜いて、ね?」

「それは……いえ、すみません。失礼をしました」

ぺこりと頭を下げてから刹那もやっとティーカップに手を伸ばす。ふんわりと鼻腔を擦ぐる優しい紅茶の香りに強張っていた刹那の表情がやや和らいだ。

「おっ、やつと可愛らしい顔になった。ずっと顰め面していたんじや勿体無いものね」

「は、はあ……」

したり顔で頷く紬に刹那は生返事を返す他ない。

「さて、落ち着いたところで本題に入りますか」

自然体のまま紬が話を切り出した。自然と刹那は背筋を伸ばして居住まいを正す。

「きつと刹那ちゃんとは私が何者なのか気になって仕方がないはず。なのでここは一度、改めて自己紹介から始めようと思います」

そう言つて紬は僅かに姿勢を正すと教室での自己紹介と同様、しかしそれ以上に真剣な表情で口を開く。

「二天一流の道場主であり十一代目新免武蔵守藤原玄信が娘、宮本紬。将来的には十二代目を継ぐため、修業のために麻帆良へ来た次第。とまあ仰々しく言つたけど、要は親父殿から十二代目を継ぐに相応しい剣者になつてこいつで武者修業に出された小娘です」

「新免武蔵守藤原玄信？」

「あ、分かり辛かった？ みんなも知つてる宮本武蔵のことなんだけど、こんな長つたらしい名前知らないのも当然よね」

「いえ、一応存じてはいます。ただ、今の話だと宮本さんは宮本武蔵の子孫ということになるのですが……？」

刹那の疑問に紬は曖昧な顔色になる。

「多分ね。一応家系図にも宮本武蔵の名はあつたから、そうみたい。ほんとかどうかは怪しいところですけど」

設定として^{生立ち}は宮本武蔵の子孫であるとされている。しかし事実かどうか示すものは家系図のみで、それが本物である保証はない。まあ真実であろうとなかろうと、紬にとってはあまり興味のない話ではあるのだが。

何せ紬はその身に宮本武蔵その人の霊基を極一部とはいえ宿している。血の繋がりがりだとか子孫なんてちやちなものではない、極論を言えば紬本人が宮本武蔵であるといつても過言ではない。それが剪定事象で断ち消えた世界出身の女性であるとしてもだ。

「宮本さんが宮本武蔵の子孫……!? それはその、こんなところでお逢いできるなんて光栄の極みというか……!」

唐突に明かされた紬の肩書き。まさか目の前の少女が彼の有名な大剣豪宮本武蔵の子孫とは思わず、思い掛けない出逢いに刹那の中で様々な感情が溢れ出した。

「落ち着いて刹那ちゃん。別に私が宮本武蔵本人ってわけじゃあるまいし、そんな緊張する必要ないから」

実際は殆ど本人に近いのだが、それを明かせば間違いなく刹那はパンクするだろう。それほどまでに宮本武蔵のネームバリューは凄まじいのだ。日本人である刹那にとってはなおのこと。

紬の言葉で我に返った刹那は恥じ入るように顔を伏せ、平静を取り戻そうと紅茶を一口含む。優しい香りと味わいに慌てふためいた精神が落ち着きを取り戻す。

「すみません、お見苦しいところをお見せしました」

「なんのなんの。刹那ちゃんの可愛らしい一面が見れてむしろ僥倖よ」

「うっ……こほん。纏めると、宮本さんは彼の有名な宮本武蔵の子孫であると。であれば、戦い慣れしているのもあの強さにも納得がいきますね」

気恥ずかしさを誤魔化すように刹那はそう結論付ける。

だが紬はやや申し訳なさにその言葉を否定した。

「それは少し違うかなあ。ちよつと事情があつてね。命懸けの戦いに巻き込まれることがしょつちゆうあつて、必死になって生き抜いていたらいつの間にかこうなっていた感じ」

「それは……」

臆面もなく笑みさえ零しながら言つてのけた紬に刹那は言葉を失う。態度や空気は軽い事この上ないが、面と向かい合っている刹那には今の言葉が嘘偽りでないことが理解できた。

刹那とて幾つもの修羅場を潜り抜けてきた自負がある。京都神鳴流剣士として斬つてきた妖物魔物の数は知れず、護衛するとある方を狙う刺客を撃退してきた回数も一度や二度ではない。まだまだ未熟ではあるものの、その実力は既に達人の域に片足を突っ込んでいる。

そんな刹那をも上回る腕前の紬は、いったいどれほどの死線を潜り抜けてきたのか。刹那には想像も及ばない。

若干の畏怖が混じった視線に紬は困ったように頬を掻いた。

「その、差し支えなければ事情を伺つても？」

「んー、別にいいんだけど。その前に、刹那ちゃんって魔法とか知ってる人だったりする？」

何の脈絡もなく投げ込まれた爆弾に刹那の顔色が僅かに変わる。紬にはその微かな変化だけで十分だった。

「やっぱりね。じゃあ教えても問題ないか」

背凭れに体を預けて紬は努めて軽い調子で明かす。

「私ね、ちよつと変わった体質持ちなの。神隠しって分かる？ 人が突然いなくなったりするアレ。私ってばその神隠しに遭いやすい体質みたいで、しょつちゆう見たこともない場所に飛ばされるのよ。転校してくるのが一週間遅れたのもそれが原因」

「神隠し……」

刹那も言葉の意味は知っている。ただ裏の世界を知る刹那からすれば神隠しは人為的な誘拐、または魔法や陰陽術絡みの事件という認識が強い。体質的に神隠しに遭うというのはどうにもしっくりこなかった。

「まあそれであつちやこつちや飛ばされてね。最初の頃は隣山とか隣町だったのが、そのうち見たこともない樹海とか国外にまで規模が広がって。酷い時は紛争地のご真ん中に投げ出されたり、妖物魔物が跋扈する世界に飛ばされたこともありました」

「そ、それは何と言えばいいか……」

そんな体験を繰り返していれば強くなるのも必然。否、強くならなければ生きていられなかった。弱いままであったのなら今この場で呑気にお茶を飲むこともできなかつたはずだ。

改めて目の前の少女の凄まじさを刹那は実感した。

「とまあ、そんな訳だね。その折に魔法とかの存在も知ったわけ。どう？ 信じてもらえましたか？」

自分語りを終えた紬は刹那に目を向ける。刹那は難しい顔で考え込み、今の話の真偽というより宮本紬という少女について吟味していた。

恐らく明かされた事情は嘘ではない。偽りにしてはあまりにも言葉に実感が籠り過ぎていた。何より、言葉を交わしていくうちに紬が

虚言を弄するような心の持ち主ではないと確信したからだ。

人柄も悪くない。明朗快活であっけらかんとした性格は好感が持てる。刹那個人としては信じてもいいと思えた。

だがどうしても気掛かりなことがある。

一つは未知数の実力。もう一つはあの時の剣気。

大浴場で紬が僅かに見せたあの剣気。背筋に氷柱を突っ込まれたかのような恐ろしい剣気の中に、刹那は狂気とは違う執念のようなものを感じ取った。紬と同じく剣士である刹那だからこそ読み取れたものである。

あれが何なのか。刹那は尋ねようかとも思ったが踏み止まった。明確な根拠はないが、それは触れてはならないものだとも本能が警鐘を鳴らしている。刹那は己の本能が発する警戒信号に従ったのだ。

「宮本さんの話に嘘偽りはないと私は思います。神隠しの原理など気になることはありますが、私個人としては宮本さんは信の置ける相手かと」

「それは重畳。じゃあ、次は刹那ちゃんの番かな」

ころりと態度を変え刹那の目を見据える紬。今度は此方の手番とばかりに問う。

「ズバリ、刹那ちゃんは何者なのかしら？ 手合わせして六割方は読めたけれど、一応本人の口からも確認しておきたいわ」

前置きもなく単刀直入に切り込む。紬が己の正体を明かした以上、次は刹那の番となるのは何らおかしくない。刹那としても紬の正体が知れた以上、ある程度までは自身の正体を明かすつもりではある。

だが果たして何処まで話していいものか。魔法奇蹟の存在を知り神隠しに遭うという特異な体質持ちの紬。一般人ではないが裏の世界の住人と断言するには微妙な立ち位置だ。

悩んだ末に刹那は少し切り込み方を変えた。

「参考までに宮本さんの予想を尋ねてもよろしいでしょうか？」

「いいけど。そうねえ……私の見立てでは、刹那ちゃんは妖物魔物の退治を目的とした流派の剣士だけど剣者ではない。誰かの護衛の任を受けた用心棒つてところかしら？」

どう？ とばかりに答えた紬に刹那は啞然と口を開いたまま硬直した。

何処まで明かすかなんて話ではない、話す前から既に殆ど知られてしまっていた。いくら宮本武蔵の子孫とはいえ、短い時間の手合わせだけでここまで見透かされるのは些か理不尽ではなからうか。

「その、殆ど宮本さんの言葉通りです。流派の名は明かせませんが、私は妖怪退治を主目的とする流派の剣士です。まだ未熟な身ですが、そしてとあるお人の護衛の任を仰せつかっています」

「なるほどなるほど……」

自身の読みが当たって紬は満足げに頷く。一方の刹那はどうしてここまで読み取られてしまったのが気にかかっていた。

「つかぬ事をお訊きしますが、宮本さんはどうやってここまで正確に私の素性を予想できたのですか？」

「ああ、それね。端的に言えば刹那ちゃんの太刀筋とか間合いの取り方、あとは立ち回りを見て推測したのよ」

人差し指を立てて紬は一つ一つ解説していく。

「流派を当てたのは間合いの取り方。人を相手にするには広いし、大振りの太刀筋が多い。かと言って雑とかそういうわけではないんだけどね。あとは立ち回り方がね、剣者にしては思い切りがないというか、常に後方を気にしているような戦い方だった。そこから、常日頃から誰かを守ることを意識しているんだろうなと予想しました。あ、得物を当てたのは手首の動きと握りの癖です」

簡単なことのように言つてのける紬であるが、事は言葉ほど簡単なものではない。手合わせとはいえ激しい攻防の最中にそれだけの情報を読み取り、流派諸々を推測するなんてことは普通は無理だ。それこそ余程の実力差がない限り。

それはつまり、紬と刹那の間には隔絶した実力差があるというわけだ。

「本当に強いんですね、宮本さん。私もそれなりに修羅場を経験してきたつもりでしたが、ちょっと自信がなくなりそうです……」

「そんな肩を落とすほどでもないと思うよ？ 刹那ちゃんも十分強い

ですし。ただ、私とは強さの方向性が違うだけ。剣の道に生きる私と違って刹那ちゃんは誰かを守る者だもの。戦い方に差が出るのは当然。実際問題、私と刹那ちゃんが本気で剣を交えたら決着が付かないんじゃないかなあ」

「どういふことでしょうか？」

今ひとつ紬の言葉に得心がいかず刹那は首を傾げる。一方的に情報を読まれてしまうほどの実力差がありながら、決着が付かないとはいったいどういうことなのか。

「うーん、要は剣士としての在り方の違い。剣者である私は勝ち負けに拘るけれど、刹那ちゃんは勝敗ではなく守り抜くことを優先する。ほら、見事に噛み合わないでしょ？ だから決着は付かない。仮にやり合ったとしても私は刹那ちゃんを倒す自信はないけどね。誰かを守る人の強さとはんでもないから」

そう言う紬の声音にはほんの僅かに羨望にも似た色が混じっていた。

それは自分にはできないだろう在り方の刹那に対する微かな憧れ。正義を語ることはできない、修羅の道に踏み込んだ剣者のほんの僅かな心残りであった。



「今日は付き合ってくれてありがとね、刹那ちゃん。おかげで私は大満足です」

「いえ、私こそ。宮本さんがどんな方なのか知れてよかったです」

喫茶店を後にした紬と刹那は日が暮れてきたのもあり女子寮へと帰ってきていた。

今日一日で刹那の紬に対する警戒は薄れた。少なくとも敵ではないことを知れただけでも刹那にとって今日一日は非常に有意義なものになったと言えよう。

寮前で別れようとする二人。しかしそこで紬が思い出したとばかりに手を鳴らした。

「あ、そうそう刹那ちゃん。教室での自己紹介でも言ったけど、私のこととは苗字じゃなくて名前で呼んでくれると嬉しいかな。苦手というわけじゃないのですが、どうにも苗字呼びはしっくりこなくてね。それに他人行儀な感じがして嫌じゃない？」

「そうでしょうか？　では、これからは紬さんと呼ばせていただきます」

「うん、それでお願いします。改めてよろしくね、刹那ちゃん」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。紬さん」

最後に笑顔を交わし、紬と刹那の長い一日が終わりを迎えた。

剣客少女と図書館島

宮本紬は「宮本武蔵」の霊基を一部埋め込まれて転生した少女である。次元の漂流者である武蔵の霊基を極一部とは言え宿した紬は、その体質を下位互換とは受け継いでしまった。それも自分の意思に関係なく発生する神隠しだ。

迷惑極まりない体質であるが繰り返すうちに慣れた——諦めたとも言おう——のもあつて、途中からは新たな出会いの機会と前向きに受け入れるようになっていた。

おかげで何事に対しても余裕を持ち、大抵のことは笑って受け流す大らかな性格になり——今も取り乱さず冷静に状況の把握に努めている。

「まさかベッドに飛び込んだところで神隠しに遭うとは……」

もはや狙っているとしか思えないタイミングでの神隠しに呆れつつ、紬は周囲の様子をよく観察する。

飛ばされた場所はどうかやら建物内部らしい。至る所に本がぎつしり詰まった棚が並んでいることから図書館のようであるが、紬の知る一般的な図書館と比べると馬鹿みたいに広い。屋内とは到底思えないほどの広さだ。

「灯りがあるのがせめてもの救いね」

夜間ともなれば照明の類は落とされているのが普通だろうが、しかし館内は所々に灯る照明によってぼんやりと照らされている。決して明るいとはいえないが歩き回るには十分な明るさだ。

「今回は何処に飛ばされたのやら」

人っ子一人いない通路を往く。躊躇いも何もないあたり慣れているだけはある。

静寂に包まれた館内に紬の足音だけがいやに響く。これが正真正銘一般人であれば心細さや何か出るのではないかと歩みを止めてしまふのかもしれないが、紬の足取りに迷いはない。唯一の気掛かりがあるとするれば、それはルームメイトたる千雨のことだ。

今回の神隠しが発生した場所はベッドの上、部屋の中である。もっ

と言えぱルームメイトである長谷川千雨の目と鼻の先でだ。付け加えると穴に吸い込まれる際にバッチリ目も合った。

普段からの態度で千雨がこの手の非現実的な現象を毛嫌いしているのは知っている。そんな彼女の目の前で神隠しによって姿を消したのだ。今頃は自身の築く堅実な現実観の崩壊を抑えるべく四苦八苦していることだろう。

「何て言い訳をすればいいのかしら……」

実は手の込んだ手品でした、なんて言ったところで誤魔化されてはくれないだろう。千雨はあれで頭の回転は悪くないし、察しも悪くない。下手な嘘を吐けばまず間違いなく看破される。

それ以前に紬は人を騙すのが上手い性質タチではないし、仲良くなった相手に嘘を吐いてまで事情を隠したいとも思わない。千雨が突っ込んで訊いてきた時は洗いざらい白状する他ないだろう。

どの道、時間の問題だった。紬とルームメイトとなった以上、いつかは神隠しの現場を目撃することになる。それが遅いか早いかの問題でしかなかつたのだ。

とはいえ千雨にとってはいい迷惑以外の何物でもない。堅実な現実観を第一とする千雨にとって、非現実ファンタジーの存在なんて受け入れたくないもの筆頭だろう。

「最悪、絶交される可能性もなきにしもあらず……うわあ、もしそうになったら凹むなあ……」

折角仲良くなりつつあった相手に距離を置かれてしまうのは辛い。それがこれから先も同じ部屋で暮らすルームメイトであればショックも一入だ。

がつくりと肩を落とし気もそぞろに歩く紬。彼女にしては迂闊なほどに注意散漫であった。此処が馬鹿広いだけの図書館だと決めつけていたのもあるだろうが、その気の緩みは致命的な過ちを招きかねない。

そう、例えば——カチツと。

「うん？　今何か踏んだような気が……」

足下から響いた音に紬は歩みを止める。目を凝らして見れば何や

ら仕掛けのスイッチのような凹みが紬の足によって踏み込まれていた。

「……何かしら、ここの物凄く嫌な予感がするんだけど」

その予感の間を置かず現実の脅威となって紬を襲う。

ガタンツ！ と物音がすると無数に並ぶ本棚の数々が傾き始めた。次から次へと連鎖的に倒れ込み、ドミノ倒しもかくやの勢いで本棚が紬を潰さんと倒れてくる。

「うっそお……」

思わずといった風に紬が引き攣った声を洩らす。現在進行形で紬を押し潰さんと迫っている本棚のドミノ倒しに、さしもの紬も顔色に青いものが混じる。

「ちよっ、洒落にならないんですけど!?!」

すぐさま紬は走り出す。今はあの本棚から逃れなければならぬ。さもなければ本がぎっしりと詰まった棚の下敷きになって圧死待った無しだ。

だが逃げる先が必ずしも安全とは限らない。罨は単発で仕掛けるものではなく、連鎖的に嵌るからこそ意味があるものである。

つまり、何が言いたいかといえば——プチッと。

「——いっ!?!」

後方から迫る本棚に気を取られていた紬が足に微かな抵抗を感じた瞬間、左右の本棚の隙間から複数の矢が射出された。間一髪で身を引き、神隠しで飛ばされる直前に引っ搦んできた木刀で弾き飛ばして難を逃れるものの、一歩間違えれば直撃する軌道だ。

「わ、割と殺意を感じる仕掛けね。此処は図書館じゃなくて絡繰屋敷だったみたい。認識を切り替えないと本気で危ないわ」

もはやここは図書館に非ず。気を抜けば命を落としかねない絡繰だらけの迷宮。身を以て知った以上、先と同じような過ちは犯さない。いい。

「ええ、これくらいピンチは何度も乗り越えてきたもの。さっさと出口を見つけて帰還してみせますとも」

自信満々に宣言して紬は直感を頼りに迷宮を突き進んでいく。



麻帆良学園都市には図書館島という施設がある。文字通り湖に浮かぶ世界でも最大規模の図書館だ。

世界各地から貴重な書物を収集し続けた図書館島は蔵書の増加に伴い増改築。その規模は島と形容するに相応しいほどの規模であり、図書館内の全貌を知る者はいない。

そんな図書館島に少年少女たちが忍び込んでいた。2年A組の成績不振者ことバカレンジャーと図書館島探検部のメンバー、加えてアスナによって連れて来られたネギである。

彼女らは図書館島深部に眠るとされる読むだけで頭が良くなる「魔法の本」を求めて夜の図書館島に足を運んだ。それもこれもどこでどう話がややこしくなったのか、今度の期末テストで最下位だったクラスは解散させられ、特に成績の悪かった生徒は小学生からやり直しだなんて噂が流れたからである。

真実は2年A組が最下位を脱出できなければネギがクビという話であったのだが、そこは2年A組クオリティ。噂に尾ひれ背びれ胸びれがつくのはいつものこと。

もう一度ランドセルを背負って小学生からやり直しなどという憂き目を避けるため、バカレンジャーたちが何かしらの方策はないかと思索し、図書館島探検部であった綾瀬夕映が口にした魔法の本に縋ったのはある意味で予定調和だったのだろう。

成績は悪くとも無駄に行動力のある彼女たちはその日の夜に作戦を立案決行。貴重書を守るために仕掛けられた対盗掘者の罠を持ち前の無駄に高い身体能力で掻い潜り、順調に地下へと歩みを進めていた。

「た、高い!? こんな高い棚の本を誰が読むのよー!？」

優に十メートルを超える背丈の本棚の天板にて神楽坂明日菜、心の叫びが口を衝いて出る。彼女の不満も尤もだ。

此処に来るまでに潜り抜けた罠の数は知れず、明らかに世間一般の

図書館を逸脱している。もはやただの迷宮と変わらない。しかも一つ間違えれば命の危機が伴うというところでも仕様である。

「うわあ、落ちたらさすがに死んじやいますかね……」

本棚の上からおっかなびつくり下を覗き込むのはネギだ。今の彼は自ら魔法を封じてしまったため、いつもの小学生離れした身体能力は発揮できず、今回の探索においては完全なお荷物となっていた。

連れて来たアスナとしてはいざという時、ネギの魔法を頼りにするつもりであったのだが、当てが物の見事に外れた。だからと言って年相応の小学生同然のネギを放っておくわけにもいかず、何かと危なっかしいネギの面倒を見ることになっている。

それがまた他の面々からはネギに好意があるのではと勘繰られる要因となり、此処に来てからアスナは気苦労が絶えない。つい不平不満が口から零れるのも致し方ないだろう。

ほんの僅かにアスナが気を抜いた。その一瞬が命取りになる。

カチツと此処にくるまで耳にタコができるほど聞いてきた罫の作動音が鳴る。仕掛けを踏んでしまったアスナは何が来るかと身構えるも、矢も本も飛んでこない。不発かと首を傾げたところで前方からネギの絶叫が聞こえてきた。

「え、ネギ!?!」

「ネギ君!?!」

声のした方に目を向ければ本棚の上から真つ逆さまに落下するネギの姿。どうやらアスナが踏んだ仕掛けは丁度ネギが立っていた場所の天井が抜ける罫だったらしい。

予想外の罫に面食らうアスナであったが、即座に動揺を振り切ると躊躇いなく本棚から飛び降りる。このかや佐々木まき絵、他の面々が制止するのも遅かった。

「アスナー!?! ネギ君!?!」

眼下に広がる真つ暗闇の中に消えていった二人にこのかたまき絵が呼びかけるも返事はない。高さ十メートル以上もある高所からまともに落ちればどうなるか。最悪の想像に二人は顔を青くする。

一方の逸般人代表である忍べていない忍者とマジカル八極拳の遣

い手は、最初こそ助けに飛び込もうとしたが今は何の心配もない様子で下を眺めている。そんな二人の泰然自若ぶりに夕映は戸惑いを隠せない。

「あの、お二人はどうしてそんな落ち着いているのです？」

「まあアスナなら問題なく這い上がってきそうアルからね」

「それに、彼女が居るならば心配無用でござるよ」

「彼女？」

夕映が首を傾げたのこのかとき絵が驚愕の声を上げたのはほぼ同時だった。

タン、タタン！ と軽快な音を立てて本棚を蹴上がってくる人影。

薄暗い図書館島内部にあつてなお鮮やかな髪を靡かせ、牛若丸もかくやの身軽さで切り立つ崖の如き本棚を登ってくる少女に、このかとき絵は非常に見覚えがあつた。

「ほっ、ほっ、いよつとー！」

天板まであと二、三段といったところで少女は僅かな足場に両足を乗せ、目一杯に膝を曲げると本棚を蹴倒さんばかりの跳躍を見せ、軽やかに本棚の上に降り立つ。その両脇には目を回すネギと目を点にしたアスナが抱えられていた。

少女は二人をゆつくりと下ろすと、一仕事終えたとばかりに息を吐く。

「いやー驚いた驚いた。出口を探して彷徨い歩いたら聞き覚えのある悲鳴が聞こえて、見上げてみればネギ君とアスナちゃんが降ってくるんですもの。びっくり」

「っ……」

「ん？」

「紬ちゃん!?!」

「はい、紬ちゃんですよっ」

今ひとつ状況を理解できぬまま驚愕入り混じる歓声を浴びせられて、紬はきよとんと首を傾げるのだった。

剣客少女と魔法の本

ネギとアスナの危機を颯爽と救ってみせた紬は、帰り道も何も分からないため済し崩し的にネギと愉快的仲間たち一行に合流することになった。

その際、紬が何処から図書館島に侵入したのかなど訊かれたものの、そこは散歩していたら迷い込んだという無茶苦茶苦しい言い訳で誤魔化した。能天気なまき絵は「紬ちゃんは方向音痴なんだね」と勝手に納得してくれるも、勉強は嫌いだが頭は悪くない夕映や勘の良いアスナあたりは訝しんでいたが。

ネギと愉快的仲間たちに仲間入りした紬は列の後方につき、この場にいる面子の中で唯一神隠しの事情を知る楓と情報交換に勤しんでいた。

「つまり此処は学園内にある図書館島内部で、皆は図書館島の深部にあると噂される魔法の本を手に入れるがため探検中と？」

「そんなところでござるな」

「なるほど、理解しました。夜中にこんな危なっかしい所に来たこととか、ネギ君連れ回していることとか、色々と文句はありますがここは飲み込みましょう。それに、楓と古菲ちゃんがいるなら万が一もそうしないだろうしね」

そう納得して紬は一先ず安堵の息を吐く。飛ばされてからネギたちと合流するまでに蓄積された疲労ゆえか、今の紬は常と比べると覇気に欠けている。

「随分と草臥れているでござるな、紬」

「そりゃあ草臥れもするわよ。知ってる？ この下には忍者屋敷が可愛く思えるほどの迷宮が広がっているのよ？ それを踏破してきた私を誰か褒めて、ほんと……」

「紬がそこまで参るほどの迷宮とは、参考までに内容を訊いても？」

興味本位で楓が尋ねる。紬は待ってましたとばかりに空寒さを覚える笑顔で語り出した。

「そうね、手始めに柵が倒れてくるのや矢が飛んでくるなんてのは序

の口。走っていたら床が抜けたり竹槍が突き出てきたり、ならばと柵を足場に跳んでいたら台風もかくやの突風が吹き荒れるわ、天井が迫ってくるとかね。えぐいのは瓦斯よ、瓦斯。あんなものどうやって切り抜けろっていうの!?!」

今にも血を吐きそうな勢いで紬はここまでの苦労を吐露する。実際にそれらの罫を体験してきただけあって言葉に込められた実感が凄まじい。

「それは災難でござったな……」

「ほんとは。まあ甲賀の里のど真ん中に飛ばされた時と比べればまだマシかもしれないけれど」

「はっはっは、紬は存外根に持つ性質タチでござるなあ」

「三日三晩追いつけ回されて根に持たない方がどうかしてますから」

うんざりと呟く紬と昔のことは忘れたとばかりにカラコ口と笑う楓。二人の関係を説明するには三年ほど時を遡る必要がある。

今から三年前、当時紬が十一の誕生日を迎えて暫くした時期。その頃から既に神隠しで世界各地へ飛ばされていた紬は、もう何度目か分からない神隠しに襲われた。

飛ばされた場所は都市部から離れた山奥の里。そのど真ん中に空からダイナミックに登場した紬は、人類未踏の樹海でも銃弾が飛び交う紛争地でもないことを喜んだ。

だがその喜びもすぐにぬか喜びに変わる。第一村人ならぬ里人に声を掛けようとしたらいきなり襲いかかってきたのだ。それも一人だけではない、その場に居合わせた者たち全員がである。

縄やら網やら投げられては如何な紬とて呑気に話し合いなんて言っていられない。その場は取り敢えず撤退を決めたのだが、この場合は相手が悪かった。

紬が飛ばされたのはただの山奥の里ではない、戦国時代より続く甲賀流の忍びが暮らす里であった。つまり追い掛けてくる者たちは殆どが手練れであり、幾度となく神隠しで世界各地に飛ばされてきた紬をして振り切れないほどの相手だったのだ。

甲賀の忍者たちからすれば紬は侵入者。連綿と受け継がれる甲賀

流忍術の秘伝を盗みにきた間者か何かかと判断し、取り敢えず捕縛に移るのは当然の帰結である。

三日三晩野を駆け山を駆け、野宿すれば夜襲を受けて、何度か捕まりかけながらも繰り返して逃走。食事中に襲撃されたことで紬が本気でキレて徹底抗戦となり、最終的には間者の疑いも晴れて和解した。だが紬の心に刻み込まれた恐怖は根強く、今でもあの三日三晩のことを夢に見たりする。

「苦無やら鎖やら鎌が雨霰と降ってきた時はもう駄目かも知れないと思っただわ。恐ろしさで言えば分身合わせて百人近い忍者に追い掛け回された方が個人的にはトラウマですけど」

実際に追い掛けていたのは十人程度だったのだろう。だがその誰も彼もが分身を使うものだから、紬の主観からすると百人近い忍者に追い掛け回されたようなものだ。

そしてその中に、当時紬と同じ年で修業中の身であった楓も居たのである。

「それを言うなら三日目の紬は悪鬼羅刹もかくやの迫力でござったからな。すわ修羅か何かを目覚めさせてしまったのではと思っただござるよ」

「あの時は睡眠不足と空腹が重なって我慢の限界だったんです。お腹が減っている時に襲い掛かってきたら誰だって怒るでしょ？」

「気持ちには分からなくもないでござるが、里の半数を伸ばされた此方の身にもなってほしいでござるよ」

まさか間者と疑った少女が一転、鬼も裸足で逃げ出す形相で里に単独突撃かましてくるとは甲賀の者たちも想像すらしなかっただろう。その間者としてはあり得ない行動から話し合いの機会が生まれ、痛み分けのような形に収まったのだが。

ともあれその後は詫びも兼ねて甲賀の里に一応客として数日ほど滞在させてもらい、美味しいご飯を頂いた。楓とも同年代ということによく話し、手合わせやら修業やらもした仲である。

紬と楓が呑気に駄弁っている間にもネギと愉快的仲間たちは目的地へと着実に歩みを進めている。

湖を超え、崖の如き高さの本棚からロープ頼りに下へ降り、服がロボロボになるのも構わず狭い隙間を匍匐前進で進み、やつこのことで目的地に辿り着く。

一行を出迎えたのはもはやどう取り繕っても図書館とは思えない、財宝でも眠つていそうな遺跡だった。

「いやいや、学園の地下に遺跡って嘘でしょ？」

「いやはや見事な造りでござるな。あの石像など、今にも動き出しそうな凝り具合」

紬と楓がそんな感想を洩らしていると何やらネギが騒ぎ出した。

「あ、あれはメルキセデクの書!? 最高レベルの魔法書がどうしてこんな所に!?!」

こんな所で目にするとは思いもしなかった品の存在にネギが驚愕する。色々と不味い単語を口走っているのだが、そこは良くも悪くも能天気なバカレンジャー。ネギの発言よりも目先のお宝に飛びついてしまう。

ただし紬と楓は戸惑い顔で視線を交わしていた。

「魔法書……」

「ううむ、神隠しなるものがあれば魔法もあり得るのか?」

片や魔法なる奇跡奇跡の存在を知る者。片や魔法は知らないが魔法と同じレベルの神隠し奇跡を知る者。ネギの迂闊な発言に引つ掛かりを覚えるのも致し方ないだろう。

尽きない疑念に顔を見合わせていると前方から複数の悲鳴。何事かと二人が顔をそちらに向ければ、魔法書が置かれた台座に続く道が稼働し、渡ろうとしていたネギたちが下へ落っこちているところであつた。

「ちよ、どうしてあんなあからさまに怪しい物に飛びつくかな!?!」

「考え無しがうちのクラスの特徴でござるよ」

「要するにお馬鹿ちゃんなのね!?!」

即座にネギたちが落下した穴に駆け寄る。

紬と楓の心配を裏切つて穴自体はそう深くはなかった。落ちた面々も怪我はなく、二人はほっと胸を撫で下ろして自分たちも穴の下

へ降り立つ。

穴の下の床には何故か五十音表が彫り込まれていた。やや上の方を見れば英単語TWISTERの文字。途端に紬は肩の力が抜けた気がした。

「もう……ちよつと皆、逸る気持ちは分かりますけど不用心が過ぎるわ。これでこの穴が底なしだったらどうするつもりだったの？」

紬は危なっかしい面々に注意を促す。ちよつと目を離すだけこれなのだから、しつかり釘を刺しておかなければ何が起きるか分からない。

などと紬がお姉さん風吹かしていたのも束の間。ズシン、と鈍重な音が響いたかと思えば頭上に影が覆い被さる。その場にいた全員が自ずと上を見上げれば、そこには岩石の大剣と大槌を構えた巨大な石像が一行を見下ろしていた。

石像は奇妙な笑い声を響かせると喋る、いや声を発する。

『この本が欲しくば、わしの質問に答えるのじゃ！』

「せ、石像が動いたー!？」

「うそー!？」

「おおおお!？」

各々がそれぞれの反応を示し動揺する中、動く石像は構わず早速問題を出し始める。

最初こそパニックに陥っていた一行であるが、冷静になったネギの指示のもと楓を抜いたバカレンジャーが出題される英単語の意味をツイスターゲーム風に答えていく。順調とは言いが、この調子でいけば余程のポカでもない限りクリアできるだろう。

子供騙しのトラップに呆れていた紬であるが、可愛い女の子たちが組んず解れつつツイスターゲームに打ち込む姿にグツとくるものを感じ、途中からは真剣な眼差しで見守っていた。

「紬、口元が緩んでいるでござるよ」

「おっと失礼。ところで楓は参加しないのかしら？」

ちらつと横目に他人事のように様子を眺める楓を見やる。隣から刺さる視線に楓は素知らぬ素ぶりで顔を逸らす。

「はて、何のことでござろうか。なに、今の所手も足りているようござるし、拙者の力は必要ないかと——」

「うわーん、ネギ君！ どうやってても手が届かないよ〜！」

「ええ!? ど、どうしましょう!?!」

何やら盤面上と外野でピンポイントなやり取りが発生。楓のこめかみをつーつと冷や汗が伝った。

「お呼びみたいですよ、忍者殿」

「いやいや、ここは拙者よりも紬殿が適任でござろうて」

「何を言う。里で身に付けた忍びの技にしがたない剣士風情が敵うはずありません。ささっ、どうぞいつてらっしやい」

いい笑顔で送り出す紬。いつの間にか盤上の面々とネギからも期待の視線を向けられていて、いよいよもって楓は観念する他なかった。

「恨むでござるよ紬……」

「はいはい、いいから頑張つてらっしやい」

渋々の体で楓は盤面上上がった。それを観客気分で見送る紬であつたが、その腕をくいくいつと引かれる。

「あの、紬さんも良かったら力を貸してくれませんか？」

いつの間に側に来ていたのか、ネギが上目遣いで協力を求めてきた。

美少年から上目遣いでのお願いとあつては紬に拒絶する選択などなく、輝かんばかりの笑顔で任せろと胸を叩く。

「ええ、勿論。ネギ君たつての頼みですもの。大船に乗つたつもりで任せて！」

調子よく盤上に飛び乗る紬。先に参加していた楓の物言いたげな視線も何のその。前世知識と神隠しで飛ばされ続けたことで身に付いた語学力をもつて軽々と問題に答えていく。

出題された問題の数が十を超え、いよいよもって大詰め。石像が最後の問題を言い渡す。

『最後の問題じゃ。「DISH」の日本語訳は?』

「えっ……何でアルか?」

「古菲ちゃん、修行もいけどもう少し勉強した方がいいかなあ……」
あまりにも壊滅的な古菲の語学力に紬も擁護できない。とはいえバカレンジャーの大半（夕映を除く）がそのレベルなので、古菲一人に限った話ではないが。

「アスナさん！ 佐々木さん！ アレですよ、ほら食べる時に使うやつ！」

「わ、分かった！ おさらね！」

「うん、任せてネギ君！」

比較的近いところに陣取っていたアスナのまき絵が文字盤を踏む。『お』『さ』ときて最後は『ら』。二人息を合わせて最後の文字盤に手と足をつく。

「これで終わり！」

勢いよく文字盤を踏む二人。これで終わりかと紬が安堵しようとするも束の間、何やら「あ……」という如何にもやらかしたみたいな不穏な声が聞こえてきた。

「おさ『る』……」

「違うアルよ——！」

「アスナさん——！？」

「まき絵——！？」

非難轟々、よりによって何故そこで押し間違えるのか。最後の最後で凡ミスを披露してしまって最終問題は不正解と相成る。

問題に全て正解できなかった以上、魔法の書は手に入らない。だが事はそれだけでは済まなかった。

『ハズレじゃな。フオフオフオ』

何やら奇天烈な笑い声を響かせて巨大な石像が岩石の大槌を振り上げる。次に何が起こるかは馬鹿にも分かった。

「させるかつ!!」

即座に文字盤を蹴って木刀を構える紬。既に石像は槌を振り下ろし始めており、出鼻を挫くことはできない。紬に残された選択肢は受け止めることだけだった。

「ぐっ——!？」

『フオウ——!?!』

「紬さん!?!」

木刀を頭上で交差させ、大槌の柄の部分を受け止める。凄まじい衝撃が全身を貫くが、そこは幾多もの修羅場を潜ってきた剣者。衝撃の大半を地面へと流して不敵に笑う。

「ふっ、この程度、なんてことないわ!」

大槌を叩き返してやらんと地面を思いつきり踏み込んで——ミシツと。

「「「え?」「」」」

力の限り紬が踏み込んだ足元から嫌な音が鳴り、蜘蛛の巣状に輝が広がる。罅割れはあつという間に文字盤全域を走り尽くし、ほんの些細な刺激で崩れかねない状態にまでなった。

こうなれば次に何が起こるかは馬鹿にも分かった。

「「「……………」」」

「えっと、ごめんね?」

顔を引き攣らせる面々に茶目つ気混じり紬が謝ると、辛うじて形を保っていた足場が崩壊するのは同時だった。

「「「紬ちゃん!?!」「」」

「これって私のせいなのお!?!」

そんな絶叫を残しながら一行は底の見えない縦穴に落ちていくのだった。

劍客少女と図書館島地下

ネギと愉快的仲間たちが落下した先に広がっていたのは、一言で言えば楽園であった。図書館島探検部の綾瀬夕映曰く——地底図書館。

地下深くであるにも関わらず温かい光に満たされ、数々の貴重書に溢れた読書家にとっては垂涎の楽園。おまけに食料やトイレにキッチンが完備されているという、百歩譲って図書室であったとしても至れり尽くせりが過ぎる場所だった。

ただし夕映曰く、この図書館を見て生きて帰った者はいないらしい。だったら何故夕映は知っているのかという疑問は湧くが、その言葉通りこの図書館から抜け出す道はなかった。それは落っこちてすぐに全員で隅々まで探索したので間違いない。

脱出経路もない地下図書室に閉じ込められたとあって一行は不安を抱き悲観しかけるも、ネギが担任らしく精一杯励ましの言葉を掛け、こんな時こそ期末に向けて勉強しようと提案したことで持ち直し、今現在はネギ指導のもと勉強に励んでいる。

幸いというか地下図書室にはご丁寧にも全教科のテキストが揃っており、勉強自体は問題なく捗っている。地下図書室の空気が無駄に快適なのもあってバカレンジャーにしては真面目に勉強に打ち込んでいるのもいいことだろう。

バカレンジャー+このかが一生懸命勉学に努めている一方、元から成績が大して悪くない紬はネギと同じくサポートに回っていた。と言つてもやることと言えば食事の用意や衣服の洗濯ぐらい。残りの時間は滝やら何やらあるのをいい事に修業に充てている。

「……………」

轟々と音を立てる滝のど真ん中。衣服を取っ払って手頃な岩の上に座禅を組んで座り込み、大質量の滝に打たれながら瞑想をする。

紬が目指すは無空の境地。空とは即ち無の観念。無念無想の域に至り、そこから更に先へ行かねばならない。紬は未だその域には達していない。精々が明鏡止水一步手前がいいところだろう。

心を完全に無にすることも未だ成せず。あらゆる邪念、想念を断ち

切らねば無念無想の領域にすら及ばないというのに、しかし紬の心は微かな焦燥に支配されていた。

このままでいいのか。果たして自分は無空の境地に至ることができるのか。一体全体何がどう不足しているのか。分からないまま、ただ心の赴くまま、風に流される雲のように生きてきた。

更なる高みを目指すために死により強い達人たちとの立ち合いを繰り返し、生き抜くために死に物狂いで剣の腕を磨いた。されど未だこの身は奥義開眼に至らず、当てもなく霧中を彷徨っている。

完成形は知っているのに、どうしてもそこに辿り着けないもどかささと不甲斐なさ。焦りは瞬く間に広がっていき、無念無想の境地すら遠のいてしまう。

こんな事を考えてしまっている時点で無念無想の境地に至れるはずもなし、これ以上は時間の無駄と判断して滝行を切り上げる。

滝の中から抜け出して水際近くの大岩に用意してあったバスタオルで体を拭く。トイレとキッチンだけに飽き足らずある程度の日用品まで完備しているのはやはり図書室の範疇を超えていると言わざるを得ない。もう住んでも問題ないレベルである。

水気を含んだバスタオルを絞っていると、此方に近づいてくる人の気配。歩き方や足音の大きさから相手が誰か看破した紬は、さっと体にバスタオルを巻いて相手を出迎えた。

「どうかしたのネギ君。何か用事でもあった？」

「あ、紬さ……ん……。ご、ごめんなさい！ 水浴びしてる最中でしたか？」

バスタオル一枚を身に纏っただけの紬を見て、ネギは顔を真っ赤にして後ずさる。そんなネギに紬は気にするなと笑いかけた。

「いいよいいよ、気にしてないからさ。それより勉強会は？」

手招きして隣に座るよう促しながら勉強会の進捗を訊く。ネギはバスタオル一枚の紬に緊張を覚えつつ、人一人分の間隔を空けて腰を下ろした。

「そうですね、皆さんとてもよく頑張ってます。この調子なら期末テストは赤点脱却のみならず、今までにない点数を取れるかもしれませ

ん」

「それは重畳。ネギ君の教えが良かったんだろうね」

「そんなことないですよ。僕がもっとしっかりしていれば、みんなをこんな所に連れてきてしまうようなことにはならなかった。不甲斐ないです」

「誰もネギ君のせいだなんて思っていないわよ。此処に来てしまったのは色々不幸が重なった結果です。むしろネギ君はよく頑張っています。私が保証するわ」

地下図書室に落ちてからのネギはアスナたちに勉強を教える傍ら、自分なりに脱出方法を模索している。その頑張りを紬はよく知っていた。

むしろ不甲斐ないのは自分の方だと紬は肩を落とす。

「ネギ君は悪くない。むしろあの時、きちんと対処できなかった私にこそ責任はあるわ。もっと早く動いていれば大槌ごと切り飛ばすこともできたでしょうに、ただの遊戯だと油断した私の手落ち。ほんと、情けない」

深々と溜め息を吐く紬。お遊びのような課題だからと気を抜いてさえいなければ、魔法書は手に入らずとも無事に帰ることができていたはずだ。それができなかつたのは己の過ち。紬が地下図書室に落ちてから暇な時間の大半を修業に充てているのはその反動でもある。

紬にしては珍しく落ち込んでいると、隣に腰を下ろすネギが違うとばかりに首を振った。

「紬さんが悪いなんてそれこそ間違っていますよ。あの時、紬さんはみんなを守ろうとして動いてくれたんですから。あのまま大槌が振り下ろされていれば、それこそ怪我人が出ていたかもしれません」

「そうかな？　そう言ってもらえると少し気が楽になるわ」

あの時の自分にそこまでの考えがあつたかは不明だ。何せ紬は剣者、突き詰めればあの場にいた誰よりも人でなしである。それこそ忍びである楓よりも、そのあたりの感性はシビアである自覚があつた。

だからこそ紬は誰かに頼られるのが好き。もっと言えば誰かに頼られることで人らしくあれる。誰かのために剣を振るっている時だ

けは皆と同じ、人間であれるような気がするのだ。

だが、もしも目の前に運命別れ道が現れたならば、きつと自分は人ではなく剣の道を選んでしまうだろうと紬は確信していた。根拠はないが、宮本武蔵剣に魅入られた自分は目指すべき場所に辿り着くまで止まらない。そういう人間だったからこそ、神なるモノに選ばれたのだろうと。

何れ辿り着くであろう極地、されど何時至るかも分からない見果てぬ境地。遠く険しい道のりを往く途中で、救いようのない剣鬼に堕ちていくのは必定。そこに寂寥を覚えないかと言えば嘘になる。

紬が未だ奥義の開眼に程遠いのは技術面だけではなく、そういった精神面の問題もあるのだろう。

小さく嘆息を洩らして紬は立ち上がる。いい加減服を着なければ風邪を引きかねない。何より、ネギの心臓にも悪いだろう。

顔を真っ赤にして「見ちゃダメだ、見ちゃダメだ……」なんて呟いているネギをもう暫く眺めていたい気持ちはあるが、意地悪も程々にしなければならぬ。今後の教師と生徒の関係のためにも。

「あ、そうだネギ君」

その場を去る前に紬は一言、常と変わらぬ笑顔を浮かべて言った。「どうしようもなく困った時は遠慮なく頼ってね、ネギ君」



期末試験を目前に控えた日曜日にもなつてくるとさすがに焦りが募り始める。勉強についてはネギの指導もあって至つて順調であるが、それも地下図書室を脱出できなければ意味がない。

状況に動きが出たのは、何か手立てはないかと悪足掻きを承知で紬が地下図書室内を探索していた時だった。

「キャ———！」

「この声はまき絵ちゃん!？」

図書室内に響き渡るまき絵の悲鳴。紬はすぐさま踵を返して悲鳴の発生源へと急行する。

巨大な木の根や本棚を足場に駆け抜け、地下図書室中央に広がる水場に辿り着くと、そこには目を疑うものがあつた。

「あの石像、一緒に落ちていたの!？」

自分たちを地下図書室へ落とした動く石像が、水浴び途中だったのだろうまき絵をその手で鷲掴んでいた。周囲には他の面々も集つており、まき絵を救出せんと動いている。

紬はその中の二人、古菲と楓に目配せを送り、駆ける勢いそのままに石像を背後から急襲する。

『フオフオフオ、諦めるのじゃ——』

「それはこつちの台詞よ、変態岩人形!!」

『フオウっ!?!』

背後から叩きつけられる怒気と叫びに石像の注意が逸れる。その一瞬、古菲が石像の懐に踏み込んで強烈な一撃を叩き込んだ。

中学生少女の拳とは思えぬほどの剛拳を受け、石像が堪らず体制を崩す。そこへ後方から跳躍してきた紬が二振りの木刀を峻烈に閃かせる。

目にも留まらぬ斬撃はまき絵を鷲掴む石像の腕を下からかち上げ、捕まっていたまき絵はその拍子に空中へ放り出される。そんなまき絵を楓がすかさず受け止め、即座に撤退した。

「まき絵ちゃん、怪我はない?」

「うん、大丈夫! それより見て見てコレ!」

そう言つて楓に横抱きにされるまき絵が見せたのは見覚えのある一冊の本。というか、見間違いでなければ上で石像が守っていたメルキセデクの書であつた。

どうやら石像と一緒に地下図書室へ落ちていたらしく、石像の首元に引つかかっていたのをまき絵が救出された一瞬で釣り上げたらしい。恐るべきはまき絵の異常なほどに達人なりボン使いか。

『い、いかん! その本を返すのじゃく!?!』

声色に焦燥を滲ませて動く石像が追ってくる。巨大な石像ゆえにそれほど速くはないが、迫力だけは凄まじい。

ネギたちが一目散に背を向けて逃走しようとする中、紬は木刀を構

えて石像の行く手に立ちはだかった。

「貴方たちは先に行って着替えていらつしやい。あと、もう一度だけ皆で図書室内を調べてみて。もしかしたら隠し通路の類があるかも。時間は私が稼ぐわ」

「紬さん!? 何をしているんですか、あなたも逃げてください!」

ネギからすれば紬の行動は無謀以外の何物でもない。しかし紬は肩越しに振り返ると自信満々の笑みを浮かべ、石像へと躊躇いなく踊りかかった。

「せいっ!」

『フアフオウ!』

よもや真つ向から立ち向かってくるとは予想だになかったのか石像の動きが鈍る。紬は恐れることなく突貫、二刀をもって怒濤の連撃を繰り出す。

「むっ、この石像、無駄に硬いわね」

『フオフオフオ、無駄じゃよ……ちよ、痛い。少しは加減をせんか?』
「襲つてきておいて言う台詞?」

捕まえようと伸びてくる石像の手をひらりひらりと躲し、比較的脆そうな関節を狙って木刀を振るう。しかしどういいうわけか、返ってくる手応えがただの石像にしては硬い。動くだけあって材質もそこらの岩石とは違うようだ。

いくら攻撃を加えても意味がない。むしろ攻撃している木刀の方が先に音を上げそうだ。これが真剣ならば石像程度に梃子摺りはしないのだが……。

「無い物強請りをしてもしようがない、か……むっ、唐突に閃いた!」

ピコーン! とばかりに頭上に電球を灯し、紬は再び石像に特攻。掴みかかってくる腕を搔い潜り、石像の兜の如き頭部、正確には覗き穴に狙いを定める。

「その眼、貰い受ける!」

『ぬわっ!? ま、待つのはじゃ、それは洒落にならんぞ!』

「問答無用!」

石像の制止にも構わず木刀の先端を兜の隙間に突き込む。人間な

らば眼球を貫通して頭部を串刺しにされる一撃。幸い相手は動く石像なので悲惨な状態にはならないものの、これで視界は潰れるだろうと紬は当たりをつけていた。

しかし、

『フォウ……なんと恐ろしいことをするのか。心臓が止まるかと思っただぞい』

「石像に止まる心臓なんてないでしょ!」

顔から木刀を生やしながらも堪えた様子のない石像に舌打ちを一つ。石像の胴体を蹴り、頭部に突き立てた木刀を抜きながら距離を取る。

改めて石像と対峙する紬。その表情に焦りの類はない。無駄に硬いため倒すのは無理だが、石像自体には大した脅威を感じないからだ。時間稼ぎだけならば丸一日でも可能だろう。

ズシン! と鈍重な音を立てて迫り来る石像に紬が身構えると、後方からネギの呼び声がかかった。

「紬さん! ありました、非常口がありました! 滝の裏です!」

「え!? 滝の裏?! うっそお!」

紬が驚くのも致し方ない。何せ彼女が修業のために使っていた滝の裏だ。非常口なんて代物があれば気づかないはずがない。

しかし現実にはネギたちが見つけた以上、滝の裏に非常口があるのは間違いないのだろう。石像もネギの言葉を聞いてあからさまに動揺しているし、ここは四の五の言っている場合ではない。

「分かった、すぐに行くわ!」

『い、いかん。待つのがじゃ〜!』

「待てと言われて誰が待ちますか!」

即座に踵を返して紬は律儀に非常口の前で待っているネギの元へ走る。他の面々は既に非常口内部なのだろう。

「ネギ君!」

「紬さん! みんなは先に行っています、僕たちも早く追いかけてみましょう!」

「もつちろん!」

頷いて紬はネギと共に非常口へ飛び込む。

非常口は地上へと続くように伸びる螺旋階段であった。見上げれば三階ほど上のあたりにアスナたちの姿がある。

「あそこね。でも、どうしてあんなにもたついているのかしら」

「それが、階段の途中に扉が幾つもあった。問題に答えないと開かない仕組みなんです」

「お馬鹿五人衆には致命的すぎる障害じゃないかしら!？」

なるほど、それならばもたついているのも納得だ。階段の途中にそんな扉が幾つもあったれば時間も食おうもの。

階段を駆け上がりながら紬は頬を引き攣らせる。しかし地下図書室に落ちてからバカレンジャーの勉強を見てきたネギはそこまで心配していないのか、先を往くアスナたちに信頼の眼差しを送っていた。

「大丈夫です。僕も以前のアスナさんたちだったら心配でしたけど、今のみんななら心配いりません」

その発言通り、アスナたちは扉の問題に正答しては上へ上へと登っていく。側から見る限りでは問題なさそうだ。

「よくもまあこの短い時間であそこまでできたものね。皆、普段からちゃんと勉強していればこんなことにはならなかったんじゃないかしら……」

「あはは、そこはちよつとコメントに困るといふか……」

こればかりはネギも苦笑いを返す他なかった。

と、紬とネギが先を往くアスナたちを追いかけると、一階下の壁が轟音を立てて崩れ落ちた。崩壊した壁から姿を現したのは動く石像である。

『待てー、本を返すのじゃー!』

「アレもほんとしつこいわね……」

「あの声、やっぱりどこかで……」

鈍重な動きで階段を上がってくる石像に辟易とする紬と首を捻るネギ。先を往くアスナたちも石像の登場に気づき、騒ぎ始めている。「やっぱりここで足止めした方がいいわね。ネギ君、君は先に――」

「——ダメです。行きますよ、紬さん」

「え、え？　ちよつ、ネギ君？」

木刀を構えようとした紬の手を取り、ネギは半ば強引に階段を上り始める。常でない強引な態度に紬は驚きを隠せない。

「いや、でも誰かが足止めしないと追いつかれて」

「大丈夫です。見る限り、動く石像ゴレムの動きは遅い。僕たちの足ならまず追いつかれることはありません。だから、紬さん一人が無茶をする必要はないんです」

「ネギ君、君は……いえ、そうですね。先生の言う通り、すこし意固地になっていたわ。ごめんなさい」

冷静になればネギの言う通りである。普通に走って追いつかれな
いのに、わざわざ紬が一人で足止めをする必要性はない。そのあたり、地下図書室へ落とされたことを根に持っていたのだろう。己の未熟さに紬は情けなくなった。

それもネギの言葉でなくなり、あんな硬いだけの鈍間に対する執着は綺麗さっぱり払拭された。代わりに紬は自身の手を握るネギの小さな手をぎゅつと握り返し、

「でも、どうせ追いつかれないのならもつと引き離れた方がいいよね、ネギ君？」

「えっ！　つ、紬さん!?!」

小柄なネギの体を横抱きにし、得意満面の笑みで階段を爆走する紬。合法的に美少年ネギと密着できていることも相まって調子は絶好調。抱えられるネギは柔らかいものが顔やら腕に当たって内心気が気ではないが。

石像なんて目じゃないほどの速度で階段を駆け上がる。殆ど紬の全力での疾走によって一分とかからずアスナたちに合流し、ネギの体勢についてやんややんや言われるもすつとぼけ、改めて全員一丸となって階段を上っていく。

それから一時間近く。さすがに一同の顔色に疲労の色が見え隠れし始めたところでそれは現れた。

「あ、あれは！　みんな、見てください！」

ネギが指差す先。そこにあるものを見て一同が驚愕の声を上げた。
「「「ち、地上への直通エレベーター!?!」「」」」

此の期に及んでまさかのエレベーターである。色々と文句は山ほどあるが、状況が状況だ。一同は藁にも縋る思いでエレベーターに乗り込み――

――ブブー! 重量OVERデス。

「「「うそおおお!?!」「」」」

無情にも告げられた事実にはうら若き乙女たちは絶叫した。

まさか二日間の飲み食い生活が祟ったのか、勉強ばかりで運動をしていなかったツケが回ってきたのか、それと単にエレベーターが根性なしなのか。何にせよこのままではエレベーターが動いてくれない。

「待って、みんな! 見て、片足出すだけでブザーが止まる。あとちよつとで動くから、持つてるものとか服を捨てて!」

珍しく機転を利かせたアスナがそう言えば、元がお馬鹿な面々は疑いもせず服を脱ぎ捨てていく。袖もそれで動くのか半信半疑になりつつ衣服を捨て、下着だけの姿になる。

困るのはネギである。右を見ても左を見ても殆ど裸に近い少女たちがいるのだから、目のやり場に困ってしまう。挙句、それだけのことをしたにも関わらずなおもブザーが止まらないのだから踏んだり蹴ったりだ。

そうこうしているうちに動く石像が追いついてしまった。

『フオフオフオ、追い詰めたぞよー』

「キヤー! 出た――ッ」

いよいよもって逃げ場もなくなり、打って出る他ないかと袖が立ち上がりかけた時、エレベーター内から飛び出す小さな影。身の丈を超える杖を手にネギが動く石像に立ち向かった。

「僕が降ります! 皆さんは先に行って明日のテストを受けてください」

「えっ!?!」

「ネギ君!?!」

「ネギ!? あんた何言ってる!」

無謀にもネギは自分一人が残って生徒を守ろうとする。それはネギが先生だから。先生が生徒を守るのは当然の行いだ。

だが、この場においてネギの勇気を黙って見ていられない者たちがいた。

「あう!」

勢い勇んで飛び出たネギが首根っこを二つの手が掴み、エレベーター内へと引き摺り戻す。下手人はアスナと紬だ。

「何してるのよバカネギ。あんたがいないまま期末受けてもしよーがないでしょーが。こういう時ばつかカツコつけたがりなんだから!」

「そうね。それに、さっきは人に一人で無茶する必要ないなんて言ってくれたのに、自分は無茶しようとするのは頂けないわ」

「えうっ、でもこのままじゃ動く石像が……」

「そんなの……」

「まあ、仕方ないよね……」

アスナと紬が何かを投げるように振りかぶる。その手にあるのは魔法の書と得物である木刀だ。

「こうするのよ——!!」

アスナが石像目掛けて魔法書を投げつける。紬は最後の悪足掻きに木刀を石像の顔面に狙いを澄まして投擲した。

魔法の書と木刀二本分の重量が減ったことで積載限界量を下回ったのか、ブザーが鳴り止みドアが閉まっていく。閉まりゆくドアの間から石像が情けない悲鳴を上げて落下していくのを見届け、紬はとりあえず溜飲を下ろした。

ともあれエレベーターは上へ向けて動き出し、数分と経たずして地上に到着した。一行は久方ぶりの地上の空気に歓喜し、外に出られたことを喜び合うのだった。



その後の顛末を語ろう。

バカレンジャーと図書館島探検部はラストスパートとして徹夜の勉強会を執り行い、当日に寝坊して遅刻するも無事にテストを受けた。しかし結果は最下位脱却ならず、ネギは責任を取って故郷へ帰ろうとする。

だがその結果は学園長の手違いによる間違いであり、集計し直した結果はなんと第一位であった2年F組を僅差で超えて2年A組が一位をもち取った。ネギは故郷に帰る必要はなくなり、正式な教師として認められることと相成ったのだ。

めでたしめでたし——とは、ならなかった。

「で、どういうことかキリキリ説明してもらおうか？」

「ええつと千雨ちゃん。私、色々あって今日のところはもう休みみたいなあ、なんて」

「吐け」

宮本紬の受難はまだまだ終わっていないなかった。

剣客少女と自称一般人

期末試験を乗り越え、ネギも学園長から出された課題をクリアして大団円となったその夜。諸々の疲れから早いところベッドで横になりたいなあ、なんて呑気に考えながら寮に戻った紬を待っていたのは仁王立ちの千雨だった。

昨夜、日曜の夜に関しては特に何も言われなかった。物凄く物言いたげな目は向けられたものの、翌日に期末試験を控えていたのもあつて追及はなかった。だから失念していたのだ。

期末試験も無事に終わり、明日からまた今までと変わらぬ日常が始まる。しかしその前に解決しなければならぬ問題があった。

「……………」

「……………」

無言で仁王立ちする千雨とその前に雰囲気流されて正座をする紬。かれこれ十分近く、無言でこの光景が続いている。千雨は懊悩に満ちた表情で時折口を開いては閉じてを繰り返し、紬は受刑者の心持ちで待ちの体勢だ。

気不味い空気がこのまま部屋を支配するかと思われたが、覚悟を決めたのか千雨が今度こそ口を開いたことで沈黙が破られる。

「あの時のあれ。私の目の前でいきなり消えたやつ。あれは手品か何かだろ？」

そう問いかける千雨の目にはそうであつてくれという懇願の色が濃い。しかし同時に、僅かながらの諦観も垣間見られた。

紬はどう答えるべきか迷った。ここで肯定すれば「やっぱりな、そうだと思うたぜ。びっくりさせるなよな」なんて言つてそのまま流すのだろう。千雨にとっては最も穏便な結末だ。

だがその場合、少なからずしこりが残る。何せ千雨は薄々気づいてるのだ。あの現象は手品でも何でもなく、ファンタジー非現実の産物なのだ。

聡明な千雨のことだ。紬が消えてすぐ、何らかの手品かCGかと疑つて調べたに違いない。だが限なく調べたところで種も仕掛けも見つけられず、挙句図書館島組と一緒にいるなんて知れば途方に暮れ

ただろう。

女子寮の一室から遠く離れた図書館島への移動。しかも図書館島組の話によれば紬とは図書館内で出会したという。

常識的に考えてあり得ない。そもそも転校してきたばかりの新参者で図書館島探検部に所属しているわけでもない紬が、いったいどうやって夜の図書館島内部に侵入するのか。

それこそ空間跳躍でもない限り不可能だ――

「なあ、お前は普通なんだよな？　そうだろう？」

縋るような声音で千雨は訊く。微かな希望に縋りつこうとしていくようなその姿に、紬は断腸の思いで決断した。

「千雨ちゃん。私は嘘を吐くのが得意じゃないの。だから本当のことを話すしかない。でも、貴方が知りたくないのであれば何も語りません。私の事情に千雨ちゃんを巻き込まないよう、距離を置くことを誓うわ。その上で、どうする？」

知るか、このまま知らずに生きるか。間違いなく、ここは千雨にとっての分水嶺だ。選択次第によっては千雨の今後の価値観が大きく左右されるだろう。

だがどちらを選ぶにしても、既に千雨の現実観^{世界}は壊れてしまっている。何せ紬のその発言自体が答えと同義なのだから。

「もう答え言ってるのと変わらねーだろ……」

紬に対する棘を含む言葉は、しかし弱々しい。ただでさえ麻帆良で日常的に発生する非日常で一杯一杯なのに、目の前で誤魔化しようのない非現実的な現象が起きてしまったのだ。これ以上は目の背けようがない。

何より辛いのは普通だと思っていたルームメイトが、麻帆良の外から転校してきた紬が普通ではなかったこと。千雨にとってはそれが堪えた。

「宮本は変人だけど、普通だと思っていた。勝手にそう思い込んで、馬鹿みたいじゃねーか……」

「…………ごめん」

勘違いしたのは千雨だ。しかし事情を隠そうとする意図がなかった

たと言えは嘘になるため、紬はただ謝るしかない。

「なんだよそれ……」

力なく呟いて千雨は髪を掻き乱す。もう立っている気力もなくなったのか、覚束ない足取りベッドに腰掛けるとそのまま膝を抱えてしまう。

再び重い沈黙が紬と千雨の間に横たわる。紬は沙汰を待つ罪人の如く静かに座して待つだけ。混乱の渦中にいるであろう千雨に声をかけることはない。

その千雨は錯綜する脳内で必死に情報を整理していた。

今までは麻帆良だけが他と違っておかしいのだと考え、外の世界は普通なのだと思ひ込むことで精神の安寧を保ってきた。それがどうだ。つい最近麻帆良へやってきたばかりの転校生までもが普通ではない、非常識側の人間だというではないか。これでは前提条件から崩れてしまう。

麻帆良だけがおかしいのではない、外の世界にも非現実ファンタジーは存在する。ただ大部分の人間はそれを知らないか気づいていないだけ。非日常は自分たちが思っているよりも身近に在ったのだ。

その明確な証拠が眼前に突き付けられてしまった以上、どれだけ否定しようとも非日常はこの世界に在る。既に在る以上、千雨がどうこう言ったところで消えるなんてことはない。そういう世界なのだと、受け入れる他ないのだ。

分かっている、分かっているが今まで築き上げてきた現実感覚を崩すのはそう簡単なことではない。なまじ堅実な現実観を意識的に固持してきたのもあってそのあたりの苦悩は一入だろう。

だがいつまでも答えを出さずにはいられないわけで――

「だーッ！ クソッ！ もういいよ、聞いてやるよチクシヨー!?!」

「ち、千雨ちゃん!?!」

自棄っぱちに立ち上がった千雨に動揺を隠せない紬。膝を抱えて悩み込んでいたかと思えばいきなり叫び出し、千雨は凄まじい形相で紬の肩に掴みかかる。

「吐け、お前の知ってることぜーんぶ洗いざらい吐け！ 毒を食らわ

ば皿までだ!?!」

「いいの? 知ったら千雨ちゃんは……」

「そんなの今更じゃねーか!? だいたいな、私が嫌だって言ったらどうするつもりだったんだよ?」

「それは、とりあえず部屋を出て行って一人暮らしても始めて、千雨ちゃんとはなるべく距離を置こうかと」

「んなことしたら私と宮本が仲違いしたとか私が追い出したとかクラスの連中が騒ぐに決まってるだろ! 馬鹿じゃねーの!?!」

「はいっ、ごめんなさい!?!」

千雨の凄まじい剣幕に気圧されて紬は謝る他ない。どうやら千雨はストレスのあまり理性の箍とかが外れてしまっているらしい。歴戦の紬をしても今の千雨には逆らえる気がしなかった。

「さあ、お前の知ってることを詳らかに吐け」

「え、えっと。話すのは構わないけど、どこまで?」

「お前の知ってる非現実^{ファンタジー}全部。出し惜しみなくきりきり供述しろ……ただ」

「ただ?」

物凄い勢いで掴みかかっていた千雨が少しばかり遠慮気味に身を引く。

「宮本が言いたくないことがあるのなら、そこはいい。それ以外は余すところなく具に話してもらおうけどな」

「——千雨ちゃん……」

まさかこの状況で千雨が気を遣ってくれるとは思っていなかった。最悪、紬は自身が転生者であることも明かさなければならないと覚悟していたからだ。それだけの不義理を働いた自覚はある。

しかし千雨は話したくないことは話さなくていいと言ってくれた。自分のことで一杯一杯だろうに、それでも隠し事を容認してくれたのだ。

「ありがとう、千雨ちゃん。じゃあ、お話します」

千雨の優しさに紬は甘えることにした。親にすら話したこともない転生者であることや霊基のことに関しては明かさず、それ以外に関

しては千雨が望む限り白状する。語る内容は恐らく刹那への説明とそう変わりはないだろう。

こうして紬の事情説明が始まり、千雨にとって色々な意味で衝撃的で長い夜が更けていく――

▽

――翌朝、ベッドの上には情報過多による頭痛で寝込む千雨の姿があった。

「うう、神隠し……怪物……魔法とか。ありえねえ……」

「千雨ちゃん、大丈夫？ うどん食べられる？」

「またうどん。朝からうどんもありえねえ……」

千雨への事情説明は刹那へしたものと大差ない。ただし千雨の場合、事の仔細まで説明を求めたために、話に纏わるエピソードまで語るようになって長くなった。おかげで千雨は徹夜も相まってダウンしたのである。

痛む頭に呻きながら千雨は体を起こす。熱こそないが徹夜の疲労もあって今の千雨は心身ともに弱っている。その原因たる紬は千雨と共に学校を休み、こうして付きっ切りで看病しているのだ。

紬からお盆ごと鍋を渡されて受け取る。出汗醤油で薄く味付けし、卵を溶き入れネギと生姜を加えた病人に優しいうどんだ。地味に紬は料理もできるため、味は問題ないだろう。

「……いただきます」

「どうぞ召し上がれ」

遠慮がちに千雨は鍋を食べ進める。そんな千雨の姿を何が嬉しいのか紬はにこにここと見守る。

「なんだよ？ ヤケに嬉しそうだな」

「そりゃあ、嬉しくもなります。事情を聞いた上で千雨ちゃんは私とルームメイトを続けてくれると言ってくれたんですもの。正直、絶交か追い出されるくらいはされると覚悟していたからね」

「お前は私をなんだと思ってるんだよ。だいたい、そんなことしたら

私が悪者扱いされるだろうが」

「その時は勿論、私が皆を説得して千雨ちゃんのせいではないと証明したわ」

だがそれも必要ない。千雨は紬の抱える神隠し体質の話聞き、それに纏わる不可思議エピソードを承知の上でルームメイトであることを容認した。未だ魔法やら何やらと信じ切れないものはあるものの、今はそれらを在るものとして受け入れたのだ。

紬にとって肉親でもない裏の住人ですらない千雨が、全てを承知の上で受け入れてくれたというのはこの上なく嬉しいことだった。

「ありがとね、千雨ちゃん」

「何回目だよそれ。いい加減しつけーよ」

心の底から嬉しそうに笑う紬に千雨はそう返した。

紬余曲折あったものの、紬と千雨の仲はまた一段と深まった。そこを2年A組の面々に揶揄われたり、紬が要らぬところで照れては千雨がムキになって否定したりとで色々な意味で関係を疑われるようになってしまふのだが、それはまた別のお話だ。

剣客少女と得物探し

期末試験も無事終わり、あとは終了式を控えるのみとなった今日の頃。ここ数日、紬は誰が見ても落ち着きがない様子であった。

意味もなくキョロキョロと周囲を見渡したり、何かしら物音がするだけで身構えたりと。何か起きそうになると過剰なまでに反応する。

挙句に十分に眠れていないのか日増しに目元のくまが濃くなり、体調も優れていない様子。

あまりにも様子がおかしいためにクラスメイトは心配し、担任であるネギも声をかけるが返答はお茶を濁したもののばかり。どうやらルームメイトである千雨には事情を明かしているようだが、その千雨も話そうとしないために心配の種となっていた。

そんなある日の放課後、事態は急展開を迎える。

「刹那ちゃん、ちよつといいかな?」

授業も終わり、生徒たちがそれぞれ部活やら何やらで教室を後にする中、今日も今日とて護衛対象を陰からお守りしようと内心で奮起していた刹那は、思い詰めた表情の紬に声を掛けられた。

ここ数日、様子がおかしいと噂されている紬からの接触。特別身に覚えはないものの、名前で呼び合う程度には仲がよい紬の変調を刹那も心配していた。

「はい、構いませんが。どうかしましたか?」

「えつとね、その……」

もじもじと言い淀みながら、紬は意を決したように頭を下げた。

「刹那ちゃん、私に付き合ってください?」

「……え!?」

放課後の教室内の言葉。決して大きな声ではなかったものの、その声は十二分に教室内に残っていた生徒たちの耳に届いた。そして当然、賑やかし好きの2年A組でそんな不用意な発言をすればどうなるかは明白で――

「……紬ちゃんが告白したあ〜!」

「え、え？ なんのこと？」

「紬さん、今のはちよつと不味いかと……」

2年A組は阿鼻叫喚の大騒ぎとなるのであった。

そんな大騒ぎの渦中にいる紬と刹那を、黒髪の少女がじつと見つめていた。

▽

「武道具屋ですか」

所変わって麻帆良商業区。教室での騒ぎをどうにか宥め、紬と刹那は電車に乗っていつかのように麻帆良の商店街に繰り出していった。

「そう。図書館島での一件で得物を失くしちやつてね。その選択を後悔はしてないし、すぐに親父殿に連絡して新しいのを用意してもらおうよう頼んだからいいんだけど。私が使っていた木刀って特注でね、手元に届くまで結構な時間が掛かるのよ」

図書館島の地下図書室から脱出する際、紬は仕方なく己の得物を手放した。そのため今の紬は完全な手ぶらである。

これが何処にでもいる一般人であれば問題なかっただろう。しかしこれが紬になると話は別だ。

「私つてば何時何処に飛ばされるか分かったものじゃないでしょ？ そうなると手元に得物が無いのは不安で不安で仕方なくて。失くしてから初めて気付くとはよく言うけれど、とにかく落ち着かないのよ。おかげで最近は何も眠れなくてね……」

憂鬱げに溜め息を吐く紬に常の余裕は見られない。いや、クラスメイトたちの前ではまだ取り繕おうとしていたのだが、気心知れた相手にまで繕えるほどの心的余裕がないのだろう。

「なるほど、だから武道具屋で木刀を見繕うということですか」

ここまでの話の流れで刹那も大凡の事情が掴めた。紬もそれで間違いないと頷く。

「間に合わせでもないよりはマシだからね。でもここで問題なのが私つてば麻帆良のことよく知らなくて、武道具屋があるのかすらも分

からないことなのよ。そこで刹那ちゃんならそのあたりのことも詳しいんじゃないかと思ひまして」

「そうですね。一応剣道部ですから、うちの部が最前にももらっている武道具屋であれば紹介できますよ」

「ほんとう？ ごめんね、急にこんなことお願いして。護衛の仕事とか大丈夫？」

「えっと、それは問題ないというか……」

口を濁す刹那の視線がチラリと後方に向けられる。その視線の先にはちよろちよろと紬たちを尾行する複数の人影があつた。

「ああ、ネギ君たち？ どうしたのかしらね、こそこそとついてきて」
「どうやら紬は最初から気づいていたらしい。特に驚くこともなく首を傾げるだけだ。」

「恐らく……最近の紬さんを心配してついてきているのかと……教室での騒ぎも後を引いていると思ひますが」

教室であんな騒ぎを起こした後に二人きりで行動をすれば怪しまれるのも無理はない。現に尾行している面子の中には報道部の朝倉和美の姿もある。あとは噂話が好きな面々や暇な連中、そしてネギとアスナとこのかというところだ。

「ごめん、まさかあんな誤解をされるとは思わなくて。でも、それならいつそ一緒に行動したほうがいいんじゃないかしら。身の潔白も証明できるし」

何も疚しいところがないなら一緒に行動してしまえばいい。そうすれば要らぬ勘繰りをされることもない。少々喧しくなってしまうのは避けられないが、有りもしない誤解を持たれたままになるよりはマシだろう。

しかし刹那としては後ろの面子と、厳密に言えばとある少女に近づきすぎるのは避けたいわけだ。

「すみません、紬さん。できればそれはなしの方向でお願いできませんか？ あまり大勢で押し掛けてお店の方に迷惑をかけるわけにもいきませんので」

「それもそつか。ま、皆も武道具屋に入れば誤解だと分かるでしょう

しね」

特別拘る理由もなかった紬はあっさり提案を引つ込める。そもそも付き合わせているのが紬である以上、刹那が望まないことは避けて当然だ。

刹那の案内で武道具屋へ向かう。その間も好奇の視線が背中にビシバシ突き刺さるが、二人は努めて気にしないようにした。

やがて剣道部が鼻貞にでもらっているという武道具屋に到着する。

「へえ、結構広いし、品揃えは悪くないみたいね」

「はい。麻帆良は学園とだけあって部活やサークルの数も馬鹿になりませんから。それに合わせてこの手のお店も充実しているんです」

刹那が勧めたとだけあって店内は広く、取り揃えられた品の数も多い。必要な道具や備品があればこの店に来るだけで十分揃えられるだろう。

ともあれ今回のお目当は紬の木刀。防具やら竹刀やらのコーナーを素通りし、稽古用に並べられた木刀を見ていく。

「うーん、間に合わせとはいえ二流品だとそれはそれで心許ないしなあ。かといって実戦に耐え得る代物もあんまり見当たらないし……」

「ここは一応学生向けのお店ですからね。さすがに真剣との斬り合いに耐えられるような物はないかと思えます」

そもそも木刀に真剣との斬り合いに耐え得る性能を求めている時点でおかしいのだ。木刀はあくまで稽古用に用いられる物。切った張ったの実戦に持ち出す物ではない。

適当に目に付いた木刀を手にとって素振りする紬に、刹那はふと気になったことを尋ねる。

「紬さんは真剣をお持ちにならないのですか？」

「真剣？ そりゃあ使えるのなら使いたいですよ。何せ相手が真剣だろうと銃器だろうとこっちは木刀二本で切り抜けないとならないんですもの」

相手が刃物やら殺傷能力の高い武器を持ち出してきたとしても、紬

は木刀二本で立ち向かうしかなかった。あらゆる戦いにおいて紬は敵以上に自分の武器にも気を遣わねばならなかったのだ。それがどれほどに不利な条件かは言うまでもない。

「でも魔法やら何やらを知っていても私は所詮一般人の生まれ。どうやっても真剣なんて工面できないし、持ち歩くこともできないわ」

神隠しやら何やらで裏の世界を知っており、なおかつ幾多もの修羅場を潜り抜けてきた紬であるが、その出自は剣道主の一人娘に過ぎない。そんな彼女に自分の剣を用立てるなんてことは無理だ。

紬にできるのはせいぜいが特注の木刀を用意すること。それもなるべく真剣の感覚に近い物にするため、芯に鉛を埋め込んで紬の要望に合わせた完全オーダーメイド品だ。値も張るが何より製作に時間がかかる。

その木刀が完成して届けられるまでの間に合わせをこうして選んでいるのだった。

ちなみに刹那は日常的に真剣を持ち歩いているのだが、紬同様長袋に仕舞って持ち歩いており、加えてお得意の陰陽術で一般人からはただの木刀にしか認識されないようになっていたりする。

「うーん、このあたりかなあ……」

「お眼鏡に適う物はありませんか？」

「お眼鏡に適うというか、この店に有るのではこれしかない感じね。仕方ないけど」

陳列された木刀の中からギリギリ合格の品を二本選び取る。やはり不満はあるようだが間に合わせの品であり、何より此処は学生向けのお店だ。これ以上の高望みはできない。

多少の不満は飲み込んで紬は木刀の支払いを済ませ、刹那と共に店を後にする。

「さて、用事も済んだことですし、どうしよつか？ 前みたいにお茶でもする？ 今日のお礼に奢るよ」

「そうですね……いえ、今日のところは遠慮させていただきます。誤解が再燃しても困りますから」

そう言つて苦笑いする刹那の視線は向かいの店に潜む怪しげな集

団に向けられていた。言うまでもなくネギと愉快な仲間たちである。「あははは、あの子たちも諦めが悪いな。仕方ない、そっちのけがあるだなんて誤解されるのも困るしね?」

「え? あ、はい! そうですね!」

「……刹那ちゃん?」

「私にもそんな性癖はありませんよ!」

怪訝な目線を向ける紬に刹那は必死さすら滲ませて否定した。その勢いに押されて紬も頷く。

「そ、そうよね。まあ私も他人様のこと言えた性質タチじゃないから、これ以上はやめておきましょう。お互いのためにも、ええ」

「誤解ですからね? 本当に違えますからね!」

顔を真っ赤にして刹那は身の潔白を訴える。まさか脳裏をとある少女の姿が過ったなんて言えないが、それはあくまで敬愛や親愛に過ぎない。それ以上ではないと暗示のように内心で言い聞かせた。

そんな刹那の胸中を知ってか知らずか、紬はあからさまに挙動不審な態度で別れを告げる。

「じゃあ私はこれにて。お礼はまた今度させてもらいます。では――」

「待ってください! 誤解です、本当に違うんです紬さん!」

スタスタとその場を去っていく紬とそれを追いかける刹那。武道具屋に入ったことで鎮火しかけた噂がこのやり取りによって再燃するとは二人も考えなかっただろう。

剣客少女と終了式

——青い空で、鳥が鳴いている。

天気は気持ちいいほどの快晴、日本晴れ。修了式にはうってつけの日和である。修了式が終わればお待ちかねの春休みということもあつて生徒たちは浮かれ気味だ。

式の進行はこれといって特筆することではなく、一般的な学校とそう大差ない。色々とぶつ飛んでいる麻帆良とだけあつて紬も多少警戒していたのだが、その点に関して言えば拍子抜けだった。

……約一名、修了式に際して発表されたことに異議申し立てをしたそうではあるが。

「違うだろっ！ おかしいだろっ!? 十歳のガキが正式に教師になるとか、いや教育実習生の時点でありえないけど!」

「落ち着いて千雨ちゃん。傷は浅いわ」

「お前が言うな、お前が!」

くわっ! と今にも噛み付いてきそうな剣幕の千雨。修了式で発表されたネギ・スプリングフィールドの中等部教諭認定が未だに信じられないらしい。仮病を装って一足先に寮へ戻った千雨はこの世の理不尽を叫ぶ。

ちなみに紬は千雨の体調を気遣って一緒に帰宅したという体だ。実際は千雨の愚痴に付き合うためなのだが。

「だいたいおかしいだろ。期末の時は一日授業サボったくせに……まあ、バカレンジャーの成績は上げたみたいだけどよ。それ以前に労働基準法はどこいった!? クラスの連中も何で突っ込まないっ!」

「そうなのよねえ。そのあたりは私も今一つ分からないのよ。思い当たる節はあるけれど、それにしただって規模が尋常じゃないですし……」

難しい顔で紬は唸る。魔法やら何やらを知っていても所詮は知っているだけ。詳しいところはさっぱりな紬に麻帆良を覆う大規模な認識障害の結界に辿り着けというほうが難しいだろう。

「くそっ、非常識側の宮本でも分からないのかよ」

「千雨ちゃん、その言い回しはちよつと失礼じゃない？」

これでも紬は一般的な常識をきちんと弁えている。その上で非常識側ファンタジーの知識もある程度まで知り得ているだけ。まあ転生者であることに突っ込めば千雨の物言いも強ち的外れとは言えないのだが。

「ああああ！ この理不尽を社会に訴えてやるっ!!」

不服そうな紬の言葉にも取り合わず、千雨は溜め込んだストレスを発散するようにパソコンに向かう。

紬がルームメイトとしてやって来た頃は隅に隠していた各種コンピュータたちも今では元の定位置にある。紬が普通でないと知って自分の趣味を隠すのも馬鹿らしくなったのだ。何より紬が秘密を守ると誓ったことも大きい。

まあ紬からすれば合法的に千雨の可愛らしいコスプレ姿を思う存分拝めるので役得以外の何物でもないのだが。

もはや紬がいても構わず隠さず自分の趣味に打ち込み始める千雨。千雨が化粧道具やら何やらを駆使している一方、紬はクローゼットから勝手に衣装を選び始めている。千雨が紬に趣味を隠さなくなった理由の一つは紬が積極的に介入してくるのも大きな理由だ。

「ふふっ、見てろよ。ネットでの私は誰もが羨むアイドルなんだからな……」

「うんうん。でも中学生で腕利きのハッカーなのは普通を逸脱していると思うのは私だけかしら……」

パソコンに夢中になっている千雨に紬の呟きは届かなかった。

化粧を終えデジカメやらの撮影機器を設置し、コスプレ衣装に着替えたら準備完了。手際よく撮影を済ませ、データをネットにアップロードしていく。

ナンバーワンネットアイドルちうこと千雨の人気は凄まじい。多少毒が強い内容のブログもまたそこがいいとされている。千雨が愚痴ればすぐに返信がくる程度には。

「こうして見るぶんには、ネットの反応も普通なのよね」

「当たり前だろ。これでネットまでおかしくなったら私はどうすればいいんだよ」

ネットの反応に満足げに頷く千雨であったが、不意にキーボードを打つ手が止まった。くるりと首を巡らし後ろからパソコンの画面を覗き込んでいた紬と目を合わせる。

「で、お前はパーティーに行かなくていいかよ」

唐突に千雨の口から出た言葉に紬は目を丸くする。

「クラスの連中が言ってた、学年一位になったお祝いパーティーだったか。皆から誘われてたろ？」

「それを言うなら千雨ちゃんこそ。ネギ君に誘われていたじゃない」

修了式で天気も快晴、先日の期末試験で学年一位を飾ったことを祝い2年A組はお祝いパーティーなるものを企画開催している。場所は寮の近くの丘の上。既に集まり始めているのか室内にいても遠くから喧騒が聞こえてくる。

「私は別にいいんだよ。あいつらのノリに付き合うのも疲れるし、そんな仲がいいわけでもねーからな」

「そんなことないと思うけどなく。偶には羽目を外して燥ぐのも悪くないと思うもの、違う？」

やんわりと紬は誘いをかける。千雨はちらりと窓の外を一瞥するが、やはり参加する気はないらしい。興味なさげに視線をパソコンに戻すと紬を追い出すように掌をひらひらさせた。

「いいからあっち行け。お前が居ると気が散るし、何より身の危険を感じる」

「ええ〜？ ……まあ、そうね。お祭りごととは好きですし、顔くらいは出そうかな。千雨ちゃんの邪魔をするのも悪いですし」

そう言つて紬は千雨に生温かい眼差しを送りつつ部屋を出ていく。残った千雨はそのまま趣味に没頭。衣装を変えては撮影し、色々と加工を加えてブログにアップロード。ネットの反応にニヤニヤと笑みを浮かべる。側から見たら怪しい人間にしか見えない。

誰の邪魔もなく至福のひと時に浸っていた千雨であるが、そこへ冷や水を浴びせかけられる。部屋の中にか千雨以外の人間が侵入していたのだ。

「うわ〜長谷川さん綺麗ですね」

「ギャ——!?! い、いつの間に!?!」

「あ、すみません。ノックしたんですが返事がなくて、ドアが開いていたので」

本当にいつから居たのか、部屋の中にはネギが居た。しかもバツチリ千雨のコスプレを見てしまっている。まるでいつかの紬にバレた時の焼き増しの如く。いや、あの時は写真であったが。

紬の時と同様最悪の事態である。既に堅実な現実感覚は木っ端微塵に碎け散っているため麻帆良やクラスの異常には多少なり目を瞑ってきたが、だからといって変人の仲間入りをしたいわけではない。千雨は何が何でも自身の裏の顔を隠蔽しなければならなかった。

斜め四十五度の角度で殴れば記憶を飛ばせるかなどと千雨が物騒なことを考えていると、廊下の方から慌ただしい足音が聞こえてくる。その足音の主は止まることなく部屋の中に入ってきた。

「千雨ちゃん、こっちにネギ君が来てるって皆が……ああ、遅かったか」

室内にいる千雨とネギを見てあちやあとばかりに頭を抱える紬。クラスメイトたちからネギが千雨を誘いに行つたと聞き慌てて戻ってきたのだが、どうやら手遅れだったらしい。

「ああ、終わった……私の学園生活が……」

がつくりと項垂れる千雨。さすがに紬の目の前でネギを襲うわけにもいかない。つまり隠蔽工作は不可能、今日から変人たちの仲間入りということだ。

落ち込む千雨とそれを励ます紬。二人が何故そんなことになつているのかネギは首を傾げつつ、思ったことをそのまま口にする。

「でも長谷川さん、とっても綺麗ですね。いつもは眼鏡をしているから分かりづらいですけど、素顔もほんとに綺麗」

「えっ——」

ありのままの感想を告げられて千雨が反射的に顔を上げる。そして自分がいつもの眼鏡をかけていないことに気づいてあたふたし、机の上に置きっ放しになっていた眼鏡に手を伸ばす。

しかしその手が眼鏡を掴むことはなく、直前にネギの手が搔っ攫っ

てしまう。

「なっ!? 返してください、私の眼鏡!」

「どうしてですか? 折角綺麗な顔なのに隠すなんて勿体無い」

「うあ……そ、それは……」

顔を真っ赤にして千雨は言葉に詰まる。子供だからかドストレートな言葉の数々に千雨は柄にもなくタジタジだ。

隣で慰めていた紬が「おや?」と首を傾げた。これはもしやいい感じなのではと空気を読み、紬は傍観者に徹する。さすがに千雨が本気で嫌がりだしたら止めに入るつもりではあるが。

「い、いいですから返してください! だいたい、何の用があつて来たんですか!」

「あ、そうでした」

千雨に言われて思い出したのか、改めて咳払いをするとネギは満面の笑顔を浮かべた。

「みんな下の芝生でパーティーをやっていますよ。長谷川さんも行きましょうよ」

「な、何言つてんだ。私はそういう馬鹿騒ぎは苦手で……」

「ええ? でも——」

ガラツとネギが部屋の窓を開ける。その先に広がるのは抜けるような青空。思わず見上げたくなる日本晴れがそこにはあった。

「——今日はこんなにいい天気なんですよ。部屋の中にいるだけなんて勿体無いです」

「——」
どこまでも続く青い空。見上げるだけで心まで軽くなりそうで、一人の悩みなんて小さなものだと思ってしまうような景色に、千雨は目を奪われる。

そんな千雨の肩に手を載せて紬が笑いかける。

「ネギ君の言う通り。偶には眼鏡を外して外の景色を見るのも悪くないと思うわ。自分の目で見ればまた違うものが見えてくるかもしれないしね」

そう言いつつ千雨の手にさり気なく、ネギから掠め取った眼鏡を握

らせる。とはいえ今日のところはその眼鏡をかけるタイミングはもうないかもしれない。

「はあ、分かりました。参加すればいいんでしょ。ったく……」

嫌々という風に参加を受け入れる千雨。しかしその表情は言葉ほど嫌がっているようには見えない。

「ほんとですか？　じゃあ早速行きましょう！」

「は？　いやちよつと待ったこの格好は——」

「——はいはいネギ君、お待ちなさい。逸る気持ちは分かりますけど、少しは千雨ちゃんのこと考えてね？」

バニーガール姿のまま連れ出されそうになった千雨をすかさず紬が押さえる。ネギはどうして止められたのか分からないといった顔だ。

そんなネギに紬は悪戯つぽく微笑みかけた。

「千雨ちゃんは着替えてから参加するから、ネギ君は先に戻ってて。それとも、千雨ちゃんの着替え姿を見たいと？」

「へっ!?　ち、違います！　失礼しました〜!？」

パタパタと慌てて部屋を飛び出していくネギ。まさに台風一過である。

疲れたとばかりに溜め息を吐いて、千雨はどことなく面白そうな目をした紬に気づく。

「いいえ。ただ私が誘った時は素っ気ない態度だったのに、ネギ君相手だと随分とあっさり頷いたな〜、なんてね」

「ぼつ、別にそんなんじゃないからね〜!？」

食いかからん勢いで否定するが、顔を真っ赤にしているは説得力などない。紬は分かる分かるとお姉さん風を吹かせて頷くばかりだ。

「ま、此処で論じてても時間の無駄だし、早く着替えて行きましょうよ。ネギ君の言う通り、本当に気持ちがいにくらいにいい天気なんだから」

「……分かったよ」

未だ納得していない顔ではあるものの、これ以上もたついでいればネギが戻ってきそうでもあり、千雨は手際よく制服に着替えた。

化粧も落とし服装を整え、最後に眼鏡をかけようとして硬直する。数回ほど眼鏡と窓の外を見比べ、やがて小さく吐息を洩らすと眼鏡を机の上に置いた。

「いいの？」

「別に、目が悪いわけじゃないし、ただのブルーライトカットだからな」

「ふーん……え、この時代にブルーライトカットの眼鏡なんてあったかしら？」

怪訝な表情で紬は小首を傾げる。幸いというか紬の眩きは千雨に届いておらず、焦ったそうに部屋を出て行こうとしている。

「さっさと行くぞ宮本。またあのガキが来ても面倒だから」

「こらこら千雨ちゃん、ガキとか言ったらダメよ。ネギ君気にしてるんだから」

「ふんっ、ガキはガキだ。実際子供だし……っつか、やっぱおかしいだろ子供が教師とか」

「そこに戻っちゃうのね……」

話が丸つと最初に戻ったことに紬は苦笑いを浮かべ、千雨は再燃した理不尽への愚痴を紬にぶつける。そんな風にじゃれ合いながら二人はパーティー会場である丘の上へと向かった。

剣客少女と吸血騒ぎ

それは雲一つない満月の夜、桜の花弁舞い散る桜通りに現れる怪異。

真つ黒なボロ布に身を包んだ血塗れの吸血鬼。恐れを知らぬ哀れな弱者を狙っては、その新鮮な生き血を啜る。

血を吸われた者に記憶はなく、所詮は噂と決めつける者も多い。事実、大部分の生徒がそうであった。

しかし噂は噂ではなく、現実に怪異は存在した。そして満月である今夜もまた、吸血鬼は獲物を求めてその目を光らせる。

逃げ惑う少女。闇夜に生きる吸血鬼に目を付けられた時点で少女の末路は既に決定付けられており、今までの被害者同様に追い詰められる。そして――

――新たな被害者がその首筋に牙を突き立てられた。



短い春休みが終わり、いよいよ新学期が始まった。

正式に麻帆良の教諭となったネギ・スプリングフィールドを担任とした3年A組。きつと今年も波乱万丈な一年になるだろうと誰もが予想する中、中等部内で妙な噂が流れていた。

「桜通りの吸血鬼？ ああ、身体測定の際にクラスの連中が騒いでいたアレか」

「そ。あくまで噂であってそんなおっかない怪異が居るとは思えないんだけど、まき絵ちゃんが桜通りで倒れていたのが気に掛かってね」

新学期始まって一日目。部活に所属しているわけでもない紬と千雨はまだ明るく人通りもある桜通りを通って下校していた。

「それでその手の情報に詳しいだろう和美ちゃんに訊いてみれば、なんとまき絵ちゃんと同じように此処で気を失っていた生徒が他にも居るって話じゃない。これはちよつと不味いかな〜と思ひまして」

「だから今日は明るいうちに帰るとか言ってきたのか……」

暫く前から流れ出した桜通りの吸血鬼の噂。3年A組の生徒たちはチユパカプラなる謎の生命体がどうのこうのと騒いでいたものの、結局は噂と決めつけ信じるようなことはなかった。それよりもその後には飛び込んできたまき絵の情報の方が衝撃は大きかったのだろう。どういうわけか桜通りで眠りこけていたまき絵。目が覚めても何故自分が桜通りで眠っていたかは覚えておらず、こちらもまた謎のままとまっている。まあクラスメイトたちは甘酒の飲み過ぎで居眠りしたとか、涼んでいたら気を失ったのだろうとそこまで重大視していなかったのだが。

今まで数々の修羅場を潜ってきた紬には、桜通りの吸血鬼とまき絵の一件が無関係だとは思えなかった。勿論、確証はない。ないが、それが対策をしない理由にはならないだろう。

「噂では満月の夜にしか出ないと言われているし、日暮れ前なら人通りもある。もし吸血鬼なるものが居たとしても、衆人環視の中で襲ってくるような真似はしないでしょう。断言はできないけど」

「ふーん……で、どうするつもりなんだよ？」

此処まで紬の話を聞くだけだった千雨が問う。訊いたものの千雨は紬がどうするかは何となく読めていた。

案の定、紬は悪戯っぽい笑みを浮かべて答える。

「そうねえ、今晚はちよつとお月見でもしてこようかしら。あ、千雨ちゃんは部屋に居てね。絶対出歩いちゃダメよ」

「お願いされても出歩かねーよ」

吸血鬼なんてファンタジー生物が出るかもしれないのに千雨が好き好んで出歩くはずもない。紬経由でそっち方面の知識はあれど、千雨は積極的に関わりたいわけでもまして巻き込まれたいわけでもない。むしろ遠ざけたいというのが本音だ。

ただ、ルームメイトが自ら関わろうとするならば気になってしまうのも致し方なく。

「別にお前が首を突っ込む必要あるのか？」

「さて、それはどうかしら。私も面倒事に好き好んで首を突っ込む趣味があるわけじゃないけど、今回は場所が寮に近いのがね。念のため

に噂の真偽だけでも確認した方がいい気がするのよ」

これが桜通りでも寮の近辺でもなければ紬は首を突っ込まなかつただろう。だが今回の騒動は寮から距離が離れていない。つまりクラスメイトや、最悪千雨が巻き込まれてもおかしくないのだ。

さすがに見知ったクラスメイトや自分のせいでも巻き込んでしまったと言っても過言ではない千雨に危害が及ぶ可能性があるのなら、未然に防ぐなり何なりする必要がある。

幸い父親に頼んでいた木刀は既に手元に届いている。いざ吸血鬼と相対したとしても得物がなくて戦えませんがということにはならない。とはいえ相手が本当に吸血鬼であった場合、さしもの紬でも太刀打ちできるかは定かではないが。

紬が懸念しているのはこの世界の吸血鬼が自分の知る吸血鬼である可能性。紬の前世知識の中に存在する創作の吸血鬼は基本的に強く、他人を操ったり人ならざるものへと墮とす能力を有している。この世界の吸血鬼がそれらと同じとは限らないが、警戒するに越したことはない。

いつになく真剣な顔色の紬に千雨はわけもなく不安を覚える。

「なあ、大丈夫なのか？」

「おやや？ もしや私の心配をしてくれているのかな千雨ちゃん？」

「ち、ちげーよ！ そんなんじやなくてだな！」

「分かってる分かってる。でも、心配ご無用！ これまでも何だかんだ生き延びてきたんですもの。吸血鬼だろうと魑魅魍魎悪鬼羅刹であろうと、そうそう遅れを取ったりはしません」

今日まで生き延びてきた自負あつてこそその気負いない台詞。事実、こと戦闘に関して紬の實力は非常に高い。それは達人レベルの古菲を相手に勝利を収め、試合とはいえ裏の世界の住人である刹那を圧倒したことが証明している。どちらも本気の果し合いではなかったため次も同じ結果になるとは限らないが。

だがあくまで一般人である千雨にそのあたりの感覚は分からないわけで、今一つ紬の實力を信じ切れなない。だからといってどうこう口出しできる問題でもないのだが。

未だ不安を拭い切れぬ様子、千雨に紬は心配ないとばかりに笑ってみせる。

「大丈夫大丈夫。千雨ちゃんはいつも通り部屋でのんびりまったり趣味に打ち込んでいてください。あ、でもお夕飯の用意はお願いできるかな。きつと帰ってきた時には空きっ腹になってるでしょうから、美味しい物を期待しています」

「お前なあ……はあ、何だか心配するだけ馬鹿らしくなってきた」

当人がまるで気負うことのない自然体であるため、これ以上心配するのも詮無いことだと千雨は疲れたように溜め息を吐く。

「晩飯の内容は期待するなよ」

「ええ？　そこは腕によりをかけて待っているところじゃないの？」

いつもと変わらぬやり取りを交わしながら二人は寮へと帰っていった。



夜の帳が下りて街灯の灯りが照らす桜通り。もう暫くすれば部活帰りの生徒が通るだろう頃合いを見計らって紬は桜通りに訪れた。吸血鬼の狙いが生徒である以上、出沒するならこの時間帯しかないと踏んだのだ。

通りの左右に植えられた桜が風に揺れる。昼間の桜と夜の桜とは印象がまるで違う。夜のそれはどこか神秘的で、同時に妖しい雰囲気漂うものとなっていた。

ひらひらと桜の花弁が舞い散る通りを紬は往く。両の手には木刀が二本。もはや長袋に入れて隠すつもりはなく、最初から戦闘になることを想定した状態だ。

千雨には噂の真偽を確かめるなどと言ったが、その実紬の中では既に答えが出ていた。今夜はそれが正しいか確認するため、何より相手の目的を探るためにこうして姿を晒している。

通りを半分まできたところだろうか。紬は徐に歩みを止めると通りに幾つもある街灯の一つを見上げる。そこに如何にも怪しげな風

体の小柄な人影が立っていた。

「噂の吸血鬼のお出ましってわけね」

街灯の上に立つ人影から得体の知れない気配を感じ取りながら、紬は驚くこともなく笑みさえ浮かべる。同時に自分の予想が外れていなかったことを確信し、内心で少しだけ憂鬱に溜め息を吐いた。

そんな紬に対して街灯の上の存在はやけに楽しそうに口を開く。

「宮本紬だな。わざわざ姿を晒したということは、私に血を提供してくれるということか？」

「まさか。私は貴方に用があつて此処に来たの。できれば穩便に話し合いたいとも思っています。ねえ——エヴァンジェリンさん？」

「——ふ」

吹き荒ぶ一陣の風に煽られ、帽子に隠された素顔が露わになる。そこにあったのは教室でも見る見知った顔。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが吸血鬼に相応しい笑みで紬を見下ろしていた。

剣客少女と桜通りの吸血鬼

油断なく見上げる紬と悠然と見下ろすエヴァンジェリン。両者共に表情は微笑であるが雰囲気は和やかなものとは言えない。一触即発とまではいかないが、張り詰めた緊張感が横たわっている。

「ほう、あまり驚いていない様子だな」

「まあね。前々からエヴァンジェリンさんの得体の知れない気配には注意していたから、その正体が実は吸血鬼でした、なんて言われてもそう驚かないわ。むしろ合点がいった」

元々警戒はしていたのだ。色々と常識外れな面々が集う3年A組にあつてなお、エヴァンジェリンの纏う異質な気配は嫌でも気になる。故にこうしてその正体を明かされても驚きは少ない。

それよりも紬はエヴァンジェリンに問い質さねばならないことがある。

「罪のない生徒たちを襲う理由は……なんて、尋ねるまでもないか。エヴァンジェリンさん、私が転校してきた時よりも力が増しているわね。微々たるものだけど」

「よく分かったな。平和ボケしたぼーやは全くといって気づいていないが」

感心したとばかりにエヴァンジェリンが笑みを深める。

「無関係の一般人にまで手を出して力を蓄える目的は何？」

「そうだな。私の正体に気づいた褒美代わりに教えてやってもいいか」

あくまでも上からの態度は崩さず、エヴァンジェリンは得意げに己の目的を語る。

「私の狙いはネギ先生だよ。厳密にはほうやの血だ」

「ネギ君の血？　というか、その口振りだとやっぱりネギ君も裏の世界の住人ってこと？」

「なんだ、私の正体には気づいたくせにそっちは知らないのか」

「前々から怪しいとは思っていたけれど、決定的な証拠もなかったからね」

怪しい言動は多々あった。しかし決定的な証拠もなく、何より十歳の子供であるということもあってそこまで気に留めていなかったのだ。だからこそエヴァンジェリンの口からネギの名が出てきたのは紬をして少なくない衝撃を受けた。

「何故ネギ君の血に拘るの？ 十歳の子供に過ぎないネギ君に執心する理由が私にはほとんど思いつかないのだけど……もしかして趣味？」
「張つ倒すぞ宮本紬。私をクラスのお馬鹿どもと一緒にくたにするな」
ピキツ、とエヴァンジェリンのこめかみに青筋が浮かぶ。さすがにシヨタコン扱いは度し難かつたらしい。まあそれを言ったら紬なんて美少年・美少女が大好きな変人であるのだが。

苛立ち混じりに腕を組み、器用に街灯の上に腰を下ろして脚を組むエヴァンジェリン。見た目が小学生と大差なくせに傲岸不遜な態度に違和感がないのは、見た目と実年齢がつり合っていないのだから。

「このままあらぬ趣味嗜好を押し付けられるのも業腹だからな、少しだけ教えてやる。ネギ先生、いやネギ・スプリングフィールドは魔法使いだ。それも裏の世界、魔法使いたちが英雄と讃える男の息子だ。私はぼーやの親父と少なからず因縁があつてな、父親の血を引くぼーやの血を大量に欲している。年端もいかない子供に色目を使っているわけではない。分かつたな？」

「え、ええ。分かりました……いえ、別に納得したわけではないけれど」

エヴァンジェリンがネギの血を狙う理由は理解した。無論、詳しい事情の類はさっぱりであるが彼女の目的が何かは判明した以上、今夜此処に来た目的の大半は達せられたと言えよう。

「さて、お前の問いには答えてやったわけだ。用が済んだのなら大人しく引いてもらおうか。それとも、私の吸血に協力するか？」

さぞ愉快そうに笑いながらエヴァンジェリンは言う。紬の返答を予想した上での言葉だろう。紬もそれを理解しながら木刀を握る手に力を込める。

「まさか。むしろ止めるわ。ネギ君のお父さんとどんな因縁があるか

は知れませんが、そのツケを彼に払わせるのは筋違いでしょ。吸血されたネギ君は只じや済まないみたいだし。何より、貴方は無関係の一般人を巻き込んだ。それもクラスメイトであるまき絵ちゃんをね。さすがにその行いを看過するわけにはいかないわ」

見て見ぬ振りはできぬと紬はエヴァンジェリンと敵対すると宣す。ここでエヴァンジェリンを見逃せば間違いなくまた襲われる生徒が出るだろう。十分な力を蓄えた暁にはネギも襲われるとあつては引けない。

幸い目の前のエヴァンジェリンは転校してきた頃より力が増しているとはいえ、手も足も出ないほどの実力差は感じられない。必ずしも勝てるとは言えないが、無関係な生徒からの吸血を邪魔する程度はできるはずだ。

だがそれもくつつと笑うエヴァンジェリンの口から出た言葉によつて止められる。

「ほう？　貴様がそれを言うのか。一般人であつた長谷川千雨に裏の世界を教えたお前が？」

その言葉が紬に与えた衝撃はネギの時よりも大きかった。

「——ッ、知っていたのね……」

ここまで余裕を保っていた紬の表情に動揺の色が滲む。

いつどこで千雨のことを知られたのかは分からない。だがこの夕イミングで千雨の名前を出す理由なんて知れている。言外にだが介入すれば千雨を狙うと脅しているのだ。

「生憎と私は悪い魔法使いでな。己の目的のためなら無関係の一般人だろうと関係ない。さて、どうする宮本紬？」

くつつと笑いを零すエヴァンジェリンに紬は険しい眼差しを向ける。両手に握る木刀に力を込め、一歩足を踏み出す。その態度にエヴァンジェリンは感心したように眉尻を上げた。

「ほう、そこであの娘は無関係ないだとか巻き込むなど喚かず剣を構えるあたり、貴様も中々に肝が据わっているな。だが残念だったな。ここで私を倒したところで意味はない。何せ私には有能な従者がいるからな。この意味が分からないわけではあるまい？」

「最初から最後まで貴方の掌の上だったわけね……」

構えかけた木刀の切っ先が力なく地面に落ちる。敵方がエヴァンジェリン単独であったならこの場で抑えるだけで問題なかった。だがエヴァンジェリンの他にも仲間がおり、その仲間の姿がこの場になり以上、紬は迂闊な行動ができない。実質千雨を人質に取られているのと変わらないのだから。

悔しげに歯噛みする紬。吸血鬼の目的を探りあわよくば企みを挫くつもりが完全に裏目に出た。

「私に何を望む？」

「そう身構えるな。別に私は貴様と事を構えたいわけじゃない。今の私にお前と遊んでやる暇はないんだよ」

そう言うエヴァンジェリンに他意は感じられない。エヴァンジェリンの狙いを鑑みれば紬に割く時間がないのは事実だろう。だからこそエヴァンジェリンは紬に横槍を入れられるのを阻止したいのだ。

「私に貴方の行動を黙認しろと、そういうこと？」

「端的に言えばそうだ。なに、安心しろ。私の本命は坊や一人だ。他の連中からは血を分けてもらっただけに過ぎん。命まで取ってやるつもりはないさ」

エヴァンジェリンに嘘を吐いているような素振りはない。実際、今まで血を吸われた生徒たちも気を失っていただけであり、現時点では後遺症の類も見られない。まき絵も放課後には無事目を覚ましていた。命まで取るつもりはないという言葉は本当だろう。

しばし紬は難しい顔で瞑目し、やがて降参とばかりに両の手から力を抜いた。

「……エヴァンジェリンさんは確かに悪の存在なのでしよう。でも外道ではない。そこは今までの被害者が無事であることから信じられる。千雨ちゃんのこととは許し難いですけど」

ジトリとした目を向け、紬は小さく溜め息を吐く。

「今回の一件、私から積極的に手を出すことはしません。ただし貴方が前言を翻して生徒たちに命の危険が及ぶようなら、私はどんな手を使ってでも貴方を止めるわ」

微かに剣気を滲ませて紬はエヴァンジェリンを睨み据える。エヴァンジェリンは紬の剣気を微風のように受け流し、満足げに笑う。「それでいい。私としても貴様のようなイキのいい奴は嫌いじゃないからな。事が終わった暁には直々に遊んでやってもいいぞ?」

「お断りよ……とりたいところだけど、私としても強者との手合わせは望むところ。今回の一件が終幕した後、エヴァンジェリンさんとの関係が決定的に悪化していなければ、改めて申し込むことにします。そうなることを願うわ」

「さてな、それはネギ先生次第だよ。ともあれこれでお前にはもう用はない。さっさと寮に帰れ……と言いたいところだが、少し茶番に付き合ってもらおうか」

「茶番?」

疑問符を浮かべる紬に対してエヴァンジェリンが懐から何かの液体が封入された試験管を取り出す。それを宙へ放ると――

「躲すも受けるも好きにしろ――氷結・武装解除!!」

「ちよつ、手を出さないって言ったそばからどういう見!?!」

試験管内の液体――魔法薬――を媒介に発動した魔法が紬を襲う。不意打ち気味の魔法攻撃に、しかし紬も無抵抗で立ち尽くすつもりはない。

即座に両手の木刀を振り上げて刃を交差させる。そこから気合一閃、有らん限りの力で振り下ろした。

生じるは気の込められた斬撃と斬撃が衝突した衝撃波。それは空中でエヴァンジェリンの放った魔法と激突し、互いに力を散らして四散する。

「ほう、気の一撃で魔法を相殺したか。随分と粗が目立つのは気になるが悪くない。本音を言えばもう少し遊んでやりたいところだが、どうやら本命が来たらしい」

「なに……?」

油断なく紬が木刀を構え直すのと後方から幼い少年の声が響いたのは同時だった。

「待てーっ! 僕の生徒に何をしますか!?!」

「ネギ君!？」

「来たか。おっと、余計な真似はするなよ宮本紬。ここから先は私とネギ先生の時間だよ」

「くっ……」

先の約束があるため紬は手出しできない。エヴァンジェリンがネギを誘うようにわざとらしくこの場を離れようとしても止めることはできず、ただ見送るだけだ。

そんな紬の苦渋に満ちた心中など知らないネギが大慌てで駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか紬さん!? お怪我はないですか!？」

「は、はい。私は大丈夫、全く問題ないわ」

ネギが魔法使用であることを知ったために少しばかり対応がぎこちない。だが子供であるネギは紬の不審な態度には気づかず、離れていくエヴァンジェリンの影を目で追っていた。

「すみません紬さん。僕はこれから事件の犯人を追いますので、紬さんは寮へと帰ってください。寄り道しちゃダメですよ!？」

「あ、ちよつと!？」

紬が止める暇もなくネギはエヴァンジェリンを追いかけて走り去ってしまう。後に残された紬は何もできない不甲斐なさに唇を噛んだ。

「はあ、釘を刺すつもりが逆に釘を刺されちゃ元も子もないわよね……」

情けなさに溜め息を吐きながら寮へ帰ろうとして、この場に向かってくる気配に足を止める。誰かと目を凝らせば見えたのは髪をツインテールに結んだ少女。何かと文句をつけながらもネギの面倒を見ている神楽坂明日菜だった。

「宮本さん!？」

アスナは紬を見つけるや否や駆け寄ってくる軽く息を切らせながら口を開く。

「アスナちゃん? そんなに急いでどうしたの?」

「えっと、ちよつとネギを探してて。こっち方面に走ってくのが見え

た気がしたんだけど、何処に行ったかしらない？」

「それは……」

アスナの問いに言い淀む紬。ここで答えればアスナはまず間違はなくネギの元へと向かうだろう。そうなれば必然的にエヴァンジェリンとネギの争いに巻き込まれるわけで、紬としてはあまり歓迎できる展開ではない。

だがアスナはそんな紬の迷いも知らぬと肩を掴むと真剣な眼差しで頼み込む。

「お願い宮本さん、知っているなら教えて。あいつ馬鹿だから。子供のくせに無茶するから、誰かが止めてやらないといけないのよ」

真つ直ぐなアスナの瞳に射抜かれて、紬は僅かに肩を落としながらネギたちの去った方角を指し示す。

「ネギ君ならあっちの方へ行つたわ」

「あっちね、分かった。ありがとう宮本さん！」

「待ってアスナちゃん」

ネギと同じく猛スピードで駆け出そうとしたアスナを呼び止める。

「……気をつけて。ネギ君のことよろしくね」

「任せて。ちゃんとあの馬鹿を連れ戻してくるから！」

そう言つてアスナは明らかに常人離れた速度で離れていく。

急速に小さくなっていく背中を見届け、紬はネギからも言われた通り帰路に着く。その表情は常の余裕のあるものではない。

「気をつけて、なんて私に言う資格もないのに何言ってるんだか。情けない……私もまだまだ修業不足かな」

結局エヴァンジェリンを止めることはできず、それどころか紬の方が釘を刺されてしまった。今後しばらくは迂闊な真似もできないだろう。

紬はがつくりと肩を落とし、千雨の待つ寮へと帰っていった。